

札幌学院大学総合研究所

BOOKLET No.2

草原の古代文化—モンゴル高原の考古学—

札幌学院大学総合研究所・モンゴル科学アカデミー考古学研究所
研究協定締結記念 国際シンポジウム

臼杵 勲

山越 康裕

鶴丸 俊明

D. ツェヴェンドルジ

董 新 林

佐川 正敏

千田 嘉博

草原の古代文化—モンゴル高原の考古学—

札幌学院大学総合研究所・モンゴル科学アカデミー考古学研究所
研究協定締結記念国際シンポジウム

臼杵 勲
山越 康裕
鶴丸 俊明
D. ツェヴェンドルジ
董 新 林
佐川 正敏
千田 嘉博

草原の古代文化—モンゴル高原の考古学—

札幌学院大学総合研究所・モンゴル科学アカデミー考古学研究所
研究協定締結記念国際シンポジウム

はじめに—北方研究とモンゴル高原

札幌学院大学人文学部教授 白杵 勲 01

I部 札幌学院大学のモンゴル調査 (報告)

モンゴル系危機言語の調査研究

札幌学院大学人文学部准教授 山越 康裕 05

チントルゴイ契丹城市遺跡

札幌学院大学人文学部教授 白杵 勲 10

エグ川・セレンゲ河の旧石器時代

札幌学院大学人文学部准教授 鶴丸 俊明 15

II部 モンゴル高原の考古学 (講演)

モンゴル考古学最前線

モンゴル国立科学アカデミー考古学研究所長 D. ツェヴェンドルジ 19

遼祖陵陵園遺跡の考古学的新発見

中国社会科学院考古研究所研究員・東北学院大学大学院客員教授 董 新 林 33

(報告)

8000年前の内モンゴルの生業を探る

—西遼河流域を中心に—

東北学院大学文学部教授 佐川 正敏 40

モンゴル中世城郭の比較考古学

奈良大学文学部教授 千田 嘉博 47

札幌学院大学総合研究所について

札幌学院大学総合研究所所長・人文学部教授 松本伊智朗 65

はじめに―北方研究とモンゴル高原

札幌学院大学人文学部教授 白 杵 勲

「モンゴル高原」という言葉から連想されるのは、果てしなく広がる緑の草原と、そこで暮らす馬・牛・羊などの家畜群、そして天幕生活をする牧民たちのイメージでしょうか。あるいは、夜になると空中に輝く星々を思い浮かべる方もいらっしゃるかもしれません。北海道人には、比較的親しみやすい風景かもしれません。多くの日本人にとっては全く未体験の環境といえるでしょう。当然、そこではぐくまれた文化や価値観も日本列島とは異なります。横綱朝青龍の行動・言動に違和感をおぼえることが多いのは、そのような異文化間のあつれきともいえます。一方、歴史的に見れば日本とモンゴルとの関係には、鎌倉時代の元寇、ノモンハン戦争など敵対的な事件が多かったのも事実です。「モンゴル高原」は遠い異質な世界、あるいは不幸な関係を持った地域というのが多くの方々の印象ではないかと思えます。しかし、モンゴル高原と特に北海道が、意外と近いというのはそう知られていないのではないのでしょうか。モンゴルを流れる大河オノン川とケルレン川は、やがて合流してアムール川（黒龍江）へとつながります。アムール川は、サハリンの対岸で間宮海峡に流れ込み、その水は冬には流氷として、北海道のオホーツク海沿岸に至ることになります。私は、調査中ケルレン川で水浴していたときに、ふとこの

水が北海道にたどり着くかもしれないことに気がつき、懐かしさをおぼえたこともありました。オノン川流域は、チンギス・ハーンの故郷の地でもあります。チンギス・ハーンが水浴した水も北海道にたどりついたかもしれません。源義経が北海道からモンゴルにわたりやがてチンギス・ハーンとなったという伝説も、あながち荒唐無稽ではないといえましょう。

考古学的にも、モンゴル高原と北海道を結ぶ資料は存在しています。北海道各地で出土する旧石器時代の細石器文化や縄文時代の石刃鎌は、モンゴル高原でも多数確認されています。現在世界遺産登録を目指して活動中の北日本の縄文時代の大集落は、内蒙古高原の新石器文化との共通性が指摘されています。また、オホーツク文化では、契丹土器の影響を受けた土器の出土が知られています。元朝は鎌倉幕府のみではなく北海道のアイヌとも紛争を起こしていました。その際に築かれたと考えられる砦址が、北海道を臨むサハリン南端に発見されています。北方考古学を研究する上でモンゴルは大変重要な位置を占めています。もちろん東アジア史や東西交渉史など、世界史上でもモンゴルは重要な地域であり、そのためアメリカ、ロシア、中国、韓国、フランス、トルコ、ドイツなど多くの調査隊がモンゴルでの調査に従事しています。

一方、現代的な意味合いでもモンゴル高原と北海道は大きな共通点を有しています。モンゴル高原の一部を占める中国の内蒙古自治区やロシアのブリヤート自治共和国では、モンゴル語を母語とする住民は急激に減少し、その言語・文化が消失の危機にあります。北海道でも、アイヌの人々の言語や文化の

次世代への継承が大きな課題となっています。共通の課題について日中間で情報・意見を交換することは、双方にとって貴重な参考資料をもたらすでしょう。

以上のような観点から、北方研究を重要な柱の一つとする札幌学院大学では、モンゴル研究を重視しています。二〇〇九年八月には、その一環としてモンゴル科学アカデミー考古学研究所と研究協定を締結しました。本ブックレットは、それを記念して二〇〇九年十二月二十三日に開催したシンポジウム「草原の古代文化―モンゴル高原の考古学」を基に執筆・編集されたものです。シンポジウムは第一部で本学のモンゴル研究の一端を紹介し、第二部では考古学の内容にしぼり、二つの講演、二つの報告、全体討議でモンゴル高原の考古学の最新成果と課題を紹介しました。モンゴル科学アカデミー考古学研究所長ツェヴェンドルジ博士の講演では、モンゴル考古学の全容をご紹介いただきました。その多彩かつ豊富な内容から、なぜ世界中からモンゴルの考古学が注目されているのか、ご理解いただけただけのものと思います。中国社会科学院考古研究所研究員董新林さんの講演は、内蒙古に根拠を置いた契丹国（遼）初代皇帝太祖の陵墓の発掘成果です。遼は中国の正当王朝の一つに認められていますので、中華帝国皇帝陵調査の最新成果を知ることのできる貴重な機会でもありました。

東北学院大学教授佐川正敏さんには内蒙古の新石器時代の生業・生活に関して報告いただきました。内蒙古では採集・狩猟を生業の基盤としながら大型の集落を形成した点で三内丸山遺跡など北日本の大型縄文集落との共通性が指摘されていますが、その具体的な内容が示されました。比較することから、

札幌学院大学総合研究所・モンゴル科学アカデミー考古学研究所

研究協定 締結記念 国際シンポジウム

草原の古代文化—モンゴル高原の考古学—

MONGOLIA

12月23日 ※ 10:30～ 札幌学院大学SGUホール

開催趣旨

インダス・ハーンのモンゴル高原の働きなど、モンゴル高原が世界史に与えた影響の検証し、当該地区で、人類の移住、農文化の伝播の大動脈、国境を越え、元軍の侵入など、モンゴルが世界史に果たした役割を明らかにする。

札幌学院大学総合研究所は、北方文化研究の最先端として、モンゴル研究に積極的に取り組んでいます。本邦内外から一連して、モンゴル科学アカデミー考古学研究所との間に、研究協定が締結されました。今回のシンポジウムは、両大学のモンゴル研究者に第一線の研究者を招き、最新の研究成果を紹介するとともに、モンゴル高原の自然環境の現状や、モンゴル研究の最新動向を報告いたします。

PROGRAM

【開会挨拶】 学長

◎札幌学院大学のモンゴル調査

【演目】 10:30～

- モンゴル系色目遺物の調査研究
山根康博 (文学部准教授)
- チントルイ(契丹)城市遺跡
日村 隆 (文学部准教授)
- エンシ川・セレン川川の巨石遺時代
藤久原明 (文学部准教授)

(昼休み)

◎モンゴル高原の考古学

【講演】 12:45～

- モンゴル考古学概論
ロジャアツツツグ
(モンゴル科学アカデミー考古学研究所所長)
- 14:00～ 近代以降の考古学的新発見
野村 隆
(中野社自然科学院考古学研究所所長)

(休 息)

【演目】 15:20～

- 8000年前の内モンゴルの生態を探る
松川正樹 (東北学院大学文学部教授)
- 15:50～ モンゴル中世城郭の比較考古学
千田嘉博 (札幌学院大学文学部教授)

16:30～ 全体討論 司会：日村 隆
【終了挨拶】 総合研究所長：松本伊智郎 (文学部教授)

後援：駐日モンゴル大使館 北海道教育委員会 13府県教育委員会

◎お問合せ

札幌学院大学 総合研究所
〒060-0855 札幌市東区南一条西五丁目1番1号
TEL: 011-396-1111 FAX: 011-396-1113
入場無料、事前申し込み不要 当日参加も承りますのでお気軽にご参加ください。

縄文文化の特質もより鮮明になったように思います。また奈良大学教授千田嘉博さんは戦国・織豊期の城郭研究者として著名ですが、今回は城郭の比較からモンゴルの中世城郭の意義を述べていただきました。モノから歴史を語る考古学の手法も、簡潔に示されました。

今回のシンポジウムとこのブックレットでは、モンゴル高原の遺跡・歴史についてご紹介し、北海道とモンゴル高原がまったく無関係な地域ではないこと、また個々の遺跡がどのような素晴らしい内容を持つているかをご理解いただけることを目的としました。中には、世界遺産登録や国家重要遺跡指定が行われた遺跡もあり、モンゴル国や中国内蒙古自治区を旅行される機会に、遺跡を見学される機会もあるかもしれません。このブックレットが、モンゴル高原の歴史・文化や遺跡に関心をいだく、きっかけになれば幸いです。

I部 札幌学院大学のモンゴル調査

モンゴル系危機言語の調査研究

札幌学院大学人文学部准教授 山越 康 裕

私はここ十年あまりの間、中国内モンゴル自治区に暮らすシネヘン・ブリヤートと呼ばれるモンゴル系民族集団の使用する、シネヘン・ブリヤート語の調査に従事しています。この言語の話者は現在約六千人しかおらず、数世代先にはその存続が危ぶまれる言語です。また、中国語やモンゴル語と日常的な接触があることから、その言語の姿が現在急速に変化しつつあります。ここでは、そのような少数民族言語を研究することの言語学上の意義を述べたうえで、研究の一端をご紹介します。

1. 記述言語研究のもつ意義

私のおこなっている研究は、言語学の中の「記述言語研究」という分野に属します。記述言語研究とは、ある言語の話者のもとに赴き、聞き取り（もしくは読み取り）調査をおこない、その言語の構造

を記述・分析する研究のことをさします。言語学というのは、その名の通り「人間言語とは何か」ということを探究する学問分野です。言語学では、言語をどのように習得するのか・言語の起源は何か・言語はどのように変化するのか・言語のもつ普遍的な構造は何か・個別の言語の構造はどのように becoming いるのか、などさまざまな研究がおこなわれていますが、いずれも「言語とは何か」という謎にアプローチするための研究ということができます。そのようなアプローチのひとつが「記述言語研究」ということとなります。

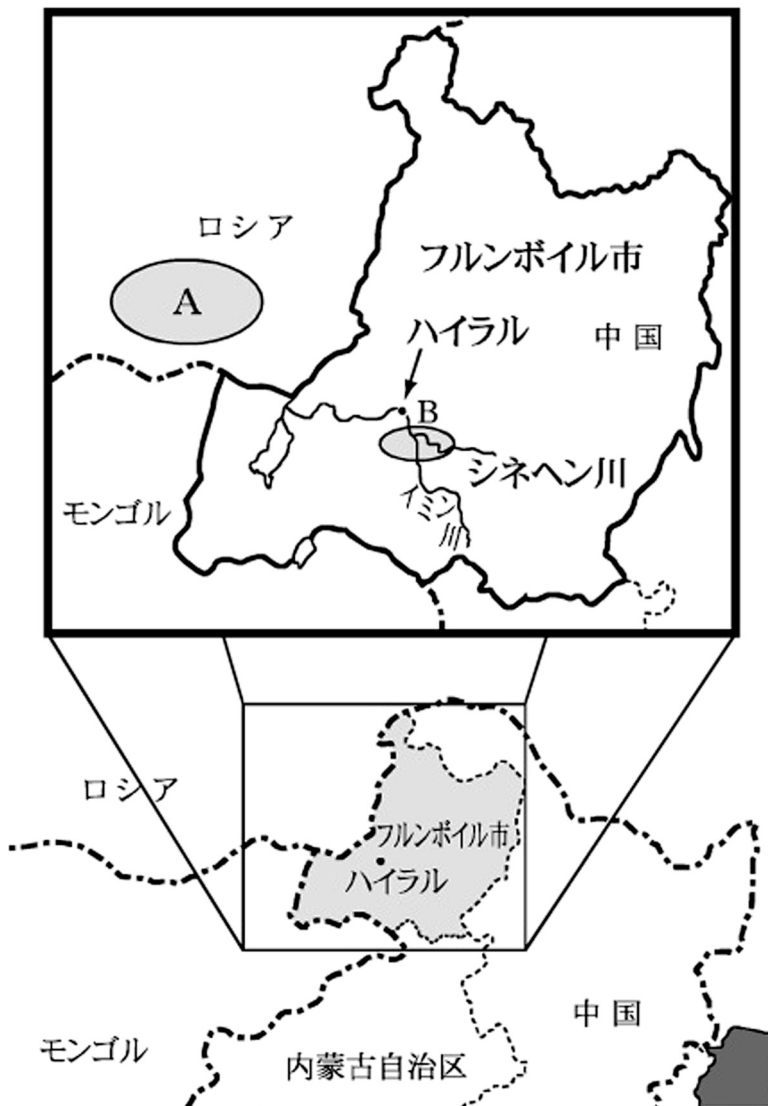
記述言語研究においては、人間言語すべてが研究対象となります。話し手の多い言語だけではなく、話し手の少ない言語についても、平等に研究する必要があります。話し手が少ないからと言って、その言語は話し手の多い言語よりも劣っている、ということにはなりません。

もちろん、話し手の多い言語を対象とした研究に比べ、話し手の少ない言語を対象とした研究は立ち遅れています。これはモンゴル語や、モンゴル語と祖先を同じくする少数言語においても同様です。だからといって、話し手の少ない言語を無視することはできません。私たちが普段耳にするような言語というのは、世界に五千〜八千存在するといわれる言語の総数のうちの、ほんのわずかでしかないからです。そのような一部の言語だけを見つめていては、人間言語のさまざまな特徴・事象を見落としてしまう可能性があります。それゆえ、少数言語の研究も必要とされるのです。

2. シネヘン・ブリヤート語の調査

モンゴル語と祖先を同じくする少数言語の記述言語研究は、先ほど述べたとおり立ち遅れています。私の研究対象であるシネヘン・ブリヤート語も、私以外に研究者がいない状況にあります。

シネヘン・ブリヤート語を使用するシネヘン・ブリヤートの人々は一九一七年から一九三二年にかけて、ロシア（ソビエト連邦）領（**地図中Aの箇所**）から中国領内モンゴル北部のシネヘン川流域（**地図中Bの箇所**）へと亡命したブリヤート人の子孫です。中国に亡命したことにより、彼らは日常的にモンゴル語や中国語に触れるようになりました。伝統的なブリヤートらしさを生活の中に残してはいるものの、言語は徐々にモンゴル語・中国語の影響を受けて変化を遂げつつあります。その変化の姿をとらえることが私にとつての重要な研究課題となります。たとえば、モンゴル語の影響を受けたことによつて述語に付される人称標示が欠落するようになってきました。また、中国語の影響により、大量の中国語語彙が取り入れられています。その中には、そのままシネヘン・ブリヤート語の動詞として機能する語彙もあります。これは他の言語からの借用語には見られない、特殊な現象です。さらに、動詞語幹に接続し、目上の相手への依頼の意味合いを付与する語尾 na 、 na: 、 na: が、物を他人に渡す際の掛け声、つまり「ほら」とか「はいよ」にあたる na という単語に接続し、 na: 、 na: 「どうぞ」というかたちをつくるという現象もみられます。これも、単語ごとの独立性が強い中国語からの影響であることが強く推測されます。こうした変化の姿をとらえることが、他言語との接触により、言語のどのような部分に、どのような



シネヘン・ブリヤートの居住地域(B)と彼らの故地(A)

変化が生じやすいのかというメカニズム解明に近づくための手がかりとなります。言語の記述、つまりシネヘン・ブリヤート語の構造を明らかにすることに加え、こうした変化のメカニズムを解明するための手がかりという点においても、このシネヘン・ブリヤート語研究は重要な意義をもつというわけです。

3. 他分野におけるシネヘン・ブリヤート研究の意義

ところで、シネヘン・ブリヤート語話者であるシネヘン・ブリヤートの暮らす地域は、他のモンゴル系・ツングース系の民族もモザイク状に分布しています。シネヘン・ブリヤートはその中であらたに加わった集団なのですが、現在、この地域で一定の社会的地位を獲得しています。彼らがなぜそうした地位を獲得できたのか、また強い民族意識はどのように保持されているのかという点は、民族学・人類学的見地からみて興味深いものといえます。また、この地域は旧満洲に含まれる地域ですが、かつての「満洲国」時代の状況などを知る高齢者もおられます。こうした方々の語り、ライフ・ヒストリーもまた、社会学や歴史学における貴重な資料となりうるかと思われまます。こうした人文科学の横断的な研究協力体制、また言語学における研究協力体制の構築も、今後求められていくことになるでしょう。



チントルゴイ契丹城市遺跡

札幌学院大学人文学部教授 白 杵 勲

はつと

内蒙古東部のシラムレン川流域を根拠地とした契丹は、一〇世紀に耶律阿保機により統一され、契丹国（遼）が建国されます。やがて中国の北辺を統治下にいれ、北宋とならぶ大帝国となります。さらに一〇〇四年には、西北地域経営の拠点とするべく、鎮州・防州・維州の辺防州三城を現在のモンゴル国の中央部に築きました。ウランバートルの西方約二百キロメートルに位置するブルガン県ダツシンチレンのチントルゴイ城址はこの鎮州城址に比定されています。ここには二万騎が駐屯したと記録されていますが、軍隊・官僚に加え、一般住民が居住し、手工業生産や商業活動が行われた都市でもありました。二〇〇六～二〇〇八年に、札幌学院大学・モンゴル科学アカデミー考古学研究所は日本私立学校振興・共済事業団の助成を得て、チントルゴイ城址の測量調査を実施しました。遺跡全体の測量と周囲の同時期遺跡の確認を目的とした調査です。また、二〇〇九年から、城址南方の窯址群の発掘調査と出土資料の整理・分析を開始しました。以下ではそれらの成果を紹介します。

1. 遺跡の概要

チントルゴイ城址は、トーラ川支流旧河道沿いの微高地部分に立地し、周辺には湖沼が点在しています。北側には烽火台が置かれたチントルゴイ山が位置します。城址はこの丘陵から下る緩斜面上に築造されています。また、遺跡の周辺には遺物が散布し、城外にも居住地が広がっていたようです。

チントルゴイ城址は長方形のプランを持ち、長辺は千二百五十六メートル、短辺は六百五十六メートルの規模があります。城外との区画は、城壁・堀・低い外城壁によつてなされています。城壁の基底幅は現状で約三十メートル、堀幅は十〜十二メートル。内部は内城壁により南北に二分されています。北城・南城ともに三ヶ所ずつ門が敷設されています。門の外側にはすべて鍵手状の城壁（甕城）が付設されています。また、各城壁には六十〜七十五メートルの間隔を置いて半円形の張り出し（馬面）がおかれます。北城・南城ともに、城内道路により区画されます。中心街路は門をつなぐように設置されています。北城・南城ともに、東西の門を結ぶ道路と南門から伸びる道路が直行します。道路幅は、二十〜三十メートル前後。一方、南城も門をつなぐように道路が設置されています。両城には、これらの中心街路の他に、これらに直行する幅員の狭い道路が走り、京都市や札幌市の町並みのように、道路による方形区画が造られています。城内には多くの建物跡が存在します。大型建物群は北城に多く、両城ともに、南北道路の東の区画に集中します。大型建物の多くが礎石建ち瓦葺建物であり、龍頭などの飾り瓦を用いたものも存在しました。もっとも顕著なのが、北城北端の建物群です。低い土塁に囲まれた東西約百

二十メートル、南北約百八十メートルの区画の中央に、幅約四十メートルの基壇を持つ大型東西建物が置かれ、その南側の東西に、直交する形で南北棟が配置されています。また、北城の西南隅と東南隅には、方形ないしコの字状に配置された建物群が存在します。主要街路交差点付近では、床暖房を伴う住居が密接して構築されていました。南城では、東南部に、大型建物が一列に並ぶ建物群が配置されました。建物配置や基壇の特徴から、寺院址である可能性もあります。

2. チントルゴイ城址の設計・築造

今回の測量で城址の設計を復元する手がかりが得られました。設計の基準尺度は唐尺（一尺三十センチ弱）で、大型道路・門の中心を基準に座標が設定され、それに応じて、道路・城壁が配置されました。城全体では、南北四千二百尺、東西二千尺で基本設計がなされています。南北道路により、北城は、西から三・四・四、東西道路により北から七・四に区画されています。南城もこの座標に沿う形で区画が設定されています。全体を四百尺の方眼にのせるとこの設計の様子がよくわかります（図参照）。南北両城で設計基準を共通させているところから、当初から、南北二城という全体設計がなされていたようです。また、街路で区画される部分の面積が道路幅の影響を受けないように、道路幅・区画端を調整していることもわかりました。

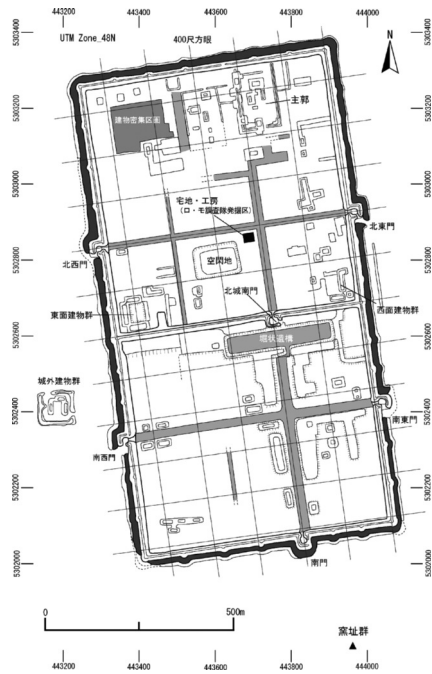
3. 窯址群試掘調査

窯址群は城址南門から南東約三百メートルに位置します。物理探査により、百メートル四方ほどの空間に窯址が数基存在することが確認されました。窯址部分は、低い高まりとなっており、肉眼でも存在が確認できます。最大の高まりで調査を行い、約半分を発掘し、構造等の内容を把握しました。窯は高まりの中央やや南側の自然の傾斜を利用して築造され、焚き口、燃料を燃やす燃焼室を低い部分に作成し、一段高い部分に土器・瓦を焼く焼成室と煙道を設けています。壁体は幅約三十センチほどの粘土ブロックをドーム状に積み上げて、作られています。焚き口の周囲にはくぼみが掘られ、作業スペースとなっていたようです。焼成室の底部にはレンガが敷かれています。内部の堆積からこの窯が複数回使用され、修理も行われていることなどが確認されました。

結語

これまでの調査では、城址全体の測量、南方窯址群の発掘を終了しました。しかし、この他にも、水路や、建物群など城外遺構が存在し、これらの把握が必要です。また、城内についても、発掘調査を行いながら、情報をより詳しく収集していく必要があります。さらに、出土遺物の考古学的検討により、城内外の活動の解明、古環境調査による城郭経営による周辺環境への影響や環境変化の解明など、多くの課題が残されています。以上の調査・研究に加え、遺跡の保護・活用にも、今後積極的に取り組んで

いく必要があり、今後も、チントルゴイ城址の調査を継続しながら、これらの課題に取り組んでいく予定でいます。



エグ川・セレンゲ河の旧石器時代

札幌学院大学人文学部准教授 鶴丸俊明

札幌学院大学総合研究所とモンゴル科学アカデミー考古学研究所の研究協定締結を記念するこのシンポジウムに際し、協定締結のきっかけに触れておきたいと思います。

それは、一九九〇年から四カ年に亘って行われた「ゴルバン・ゴル（三本の川）計画」とよばれる日本・モンゴルの共同プロジェクトとそこでの信頼関係の構築です。作家の開高健さんが企画して読売新聞社とモンゴル科学アカデミーが共催したこの計画は、①チンギス・ハーンの陵墓の探索、②両国でのモンゴル時代に関わるシンポジウムの開催、③日本でのモンゴル時代歴史資料展の開催を柱にしたものです。陵墓の探索地域を現在のモンゴルの聖地ヘンタイ・ハーン山から流れ出る三本の川（ヘルレン・トーラ・オノン川）の源流域を含むことから、この名がつけられました。

一九九〇年はモンゴルにとって記念すべき年です。旧ソ連に続いて世界で二番目の社会主義国となつたこの国が、その道を離脱して総選挙を実施した年なのです。選挙が実施される数ヶ月前の政治は混沌とし、経済的にも食料やガソリンなどの生活必需品が払底した混乱の中で、考古学者から物理学者・宇

セレンゲ河

モンゴル中部からバイカル湖に注ぐ大河。モンゴルでは一般の川をゴル、大河をムルンと呼びます。そのためエギンゴル、セレンゲムルンを、それぞれエグ川、セレンゲ河と表記しました。

宙飛行士まで、たくさんの方が研究者がモンゴル隊を結成して合流し、三ヶ月以上もの間寝食をともにしました。これはモンゴルにとって初の自由主義社会との共同調査でした。

そのような中で彼らの大変さはあえて言うまでもありません。一方私たち日本隊もかの地の自然に圧倒され、考え方の違いに困惑する日々を送りました。三月末とはいえまだ厳冬のヘンティイ・ハーン山中に入って寒さに震え、吹雪に閉じ込められ、粗食に耐える毎日です。その様子はまるで探検隊のようでした。それ以上に大きな問題は「調査方法」についての考え方の相違でした。そのため、延々と続いた会議後も個別に話し合うことも毎度のことと、ときには激しくぶつかり合うこともありました。そのような時に冷静にモンゴル隊をまとめ、日本隊との調整役に徹されたのが、時のモンゴル隊副隊長で、今回のシンポジウムに来てくださったツェーベン・ドルジ所長です。日本隊の同じ立場の私と同年齢ということもあり、ずいぶんと気を遣っていたのだし、助けてもいただきました。

調査はチンギス・ハーンの陵墓候補地を四カ所に絞り、その他の計画も順調に遂行して無事に終了することが出来ました。本気でぶつかり合い、本音で話し合った四年間でしたが、それがあつたからこそ、信頼関係が芽生え、今に続いているのだと思います。その後、この調査に参加した隊員はもちろん多数の研究者がいろいろな立場でモンゴルの調査・研究に携わっていますが、この時にそれぞれに学んだ成果がそこに生かされているのだらうとも思います。

七年前、所長からモンゴルでの旧石器時代の共同調査のお誘いをいただきました。「あなたが掘りたい

ところを掘っていいよ」という言葉を胸に、躍る心をおさえつつ草原に足を踏み入れることになりました。それは二〇〇四年のことになります。

モンゴルまで

私のモンゴルでの目的は旧石器時代遺跡の調査です。しかし、今年までは遺跡の分布調査を主眼にしていて本格的な発掘調査をしていませんのでまだまとまった成果はありません。ですから、ここでは「なぜモンゴルの掘るのか」「なぜエグ川・セレンゲ河で掘るのか」という話にしたいと思います。

私は一九八八年から九七年まで、石狩川の上流から下流に向けて古い時代の遺跡を探していました。その目的は千歳市祝梅遺跡三角山地点や上幌町嶋木遺跡に代表される北海道最古の石器群（約二万年前）といわれながら実態の不明なそれらの内容の解明です。これに始まる一連の調査で、私たちは美唄市、下川町、置戸町でそれまでには見られない新たな石器を得ることが出来ました。三角山地点や嶋木遺跡とも異なる石器で、技術的にはさらに古い特徴を持つ石器です。ではそれらに類似する石器はどこに見られるかというと、大陸、それもロシア・アルタイ地方からモンゴルにかけての広大な地域でした。ここで、私たちは新たに手にした石器が本当に大陸の石器に技術的につながるのか、その後にくつと思われる三角山地点等の石器との間にどのような石器（文化）が存在するのかという二つの大きな課題を抱えることになったわけです。そのような時に、ツェーベン・ドルジ所長からお誘いを受けたわけです。

モンゴルへ

最初に足を踏み入れたのは、ゴルバン・ゴル計画で歩き回ったモンゴル東部でした。そこは類似した石器が分布している東端の地域です。二〇〇五年からの四年間、この付近で遺跡の分布状況を把握して三カ所で試し掘りをしますが、本来遺物を覆っていた土壌が流失して旧石器時代の遺物が表面に洗い出されて、しかも上下層のものが混ざり合っている状態でした。これでは、細かな考古的な情報を得ることはできません。そこで、やむなくすでにロシア・フランス・アメリカ隊が赫々たる成果を挙げているモンゴル中部のエグ川・セレンゲ河流域に調査地を移すことにしました。その地域には、厚い更新性土壌の中に幾層にも旧石器時代の石器が遺されており、ロシア隊の調査地では人の歯が、フランス隊の調査地ではバイソン、ダチョウやウサギの骨や、ダチョウの卵の殻で作ったビーズが石器とともに発見されています。そして後者では約二万九千年前の測定年代が得られています。これは、私たちが置戸町の遺跡で得ている年代三万二千年前と極めて近い年代ですので、北海道の新たな石器文化の系統を探る上で、比較するには最適な遺跡だと思われれます。

私は二〇〇九年にこの地に入って各遺跡を巡検したあと、すでに調査を終了しているアメリカ隊の調査地に白羽の矢をたてました。今、そこを発掘したエール大学に連絡をし、確認をとっているところですが、話し合いがつけば、二〇一〇年、そこで発掘を始めます。

II部 モンゴル高原の考古学

講演

モンゴル考古学最前線

モンゴル国立科学アカデミー考古学研究所長

D. ツェヴェンドルジ

(翻訳 N. バタムガラフ)

1. モンゴル考古学のあゆみ

モンゴルには、非常に古くから人類が居住し、遊牧生活技術の成立後はアジアの遊牧文化の中心地となりました。そのため、考古学上の遺跡が豊富に存在しています。ですから一九世紀末に近代考古学が導入されるとすぐに、モンゴルの遺跡の科学的調査が始まりました。革命後の一九二二年の末には科学・文化研究所の中に歴史研究室が設けられ、遺跡の情報収集、調査、登録が行われました。一九二〇〜三〇年代に行われた古代史研究は、主に歴史学、考古学、民族学上の歴史的遺産の登録と、それらの調査でした。一九五〇年代からペルレー、ドルジスレンを初めとするモンゴル人考古学者による研究が開始され、同時にソ連及び他国の調査団体との共同研究が開始されました。一九六九年から一九八〇年代末までに「モンゴル・ソビエト歴史文化共同調査団」により行われた調査は、モンゴル考古学研究におい

て重要な役割を果たしました。一九九〇年代に入ると、日本、韓国、ロシア、アメリカ、ドイツ、フランス、トルコ、イタリア、ベルギー、スイスなど他国の研究機関や大学と共同して、数々の共同研究企画が実行され、現在に至っています。モンゴル科学アカデミー考古学研究所は、モンゴル国の考古学研究の中心であり、上記に述べた国々の研究機関・大学との共同研究を行い、現在では年間十ヶ所以上で調査を実施しています。今回は、モンゴル国内に於ける主要な考古遺跡を、最近の研究成果に基づきながら紹介しようと思います。

2. 旧石器・新石器時代の遺跡研究

モンゴルで石器時代の遺跡研究が始まって以来、過去八十年間で千ヶ所以上の遺跡が発見され、数多くの遺物が研究資料として収集されました。近年では、モンゴル西部、例えば一九九五～二〇〇〇年の間に蒙・露・米共同調査隊による発掘が行われたバヤンホンゴル県バヤンリグ村のツアガン・アグイ遺跡など、西南部で行われた調査の結果、前期旧石器時代アシューリアン期以前（七十三万年～八十万年前）の遺跡が発見され、精密な調査の結果、年代はさらに遡る可能性が高いと考えられています。モンゴルの下部（前期）旧石器時代の代表的な遺跡は、バヤンホンゴル県ウルジト村のナリン・ゴル遺跡群であり、その中で最も古いのは、ナリン・ゴル一七遺跡です。そこから出土した二百以上の石器をロシアの研究者らが比較検討した結果、八十万年前より更に古い時代に属する可能性があると考えられています。

ます。南部のゴビ砂漠地帯に位置するツアヒオルティン谷遺跡は、遺跡の範囲が二十キロ平方にわたり、前期旧石器時代から後期新石器時代に属する何十万点もの石器が確認されました。これほど幅広い面積や年代を持つ遺跡は、中央アジアのみならず世界でも大変まれであり、世界の代表的な石器時代遺跡として位置づけられます。また、二〇〇六年にヘンティ県ノロヴリン村のサルヒトイン谷遺跡にて発見された、「モンゴラントロプス」という名称で考古学界に知られている古人類の頭骨はモンゴルの古代史考古学・人類学において貴重な研究材料であるだけでなく、世界の形質人類科学者たちの注目の的となっています。頭骨の比較研究を行った人類学者たちの見解は、モンゴラントロプスを**古代型ホモ・サピエンス**とする見方と、ホモ・エレクトゥス（原人）の中期から後期に属するという見方に別れています。これまでモンゴルで発見された古代人骨は、六〇五千年前の新石器時代のものがほとんどでしたが、ヘンティ県で発見された頭骨は、何万年前にさかのぼる貴重な研究材料です。今後の精密調査により、帰属が確定することにより、人骨と関わる新たな考古学上の発見につながることも期待されるのです。

二〇〇六～二〇〇九年に行われた「モンゴル東部旧石器文化調査隊」（代表・札幌学院大学鶴丸俊明准教授、考古学研究所ツォグトバートル博士）の調査は、モンゴル・日本の共同研究として、オノン、ホルフ、ウグルグチン、エギン川流域で実施されました。ここで行われた測量、試掘、発掘により発見された数々の遺跡は、モンゴル石器文化研究において、極めて重要な研究内容をもっています。その他にも、モンゴル日本共同調査隊によりヘルレン川流域の一般調査、ヘンティ県デルハーン村のハンザツ

古代型ホモ・サピエンス

現生人類（現代型ホモ・サピエンス）以前から存在したホモ・サピエンスの亜種の総称。ネアンデルタール人はその代表例。

ト遺跡群に行われた発掘調査の結果報告も注目すべきものです。今後は、モンゴル・日本共同研究の調査範囲をさらに拡大し、これまで調査が行われていない地域での、新たな遺跡や文化層の発見を目指しているところです。

3. 古代墳墓（遊牧民の墳墓）

モンゴルの考古遺跡の主要分野の一つが、過去の遊牧民たちが遺した墳墓です。現在、それら全ての位置や数などの正確な情報は確認されていませんが、何千ヶ所もの遺跡があることは確実です。ここでは、それらの代表的な例を幾つか紹介しましょう。

方形墓（立石墓） 代表的な墳墓の一つ方形墓は、主に丘陵部の谷・斜面・ふもと、あるいは平地部に立地し、通常一ヶ所に十基から数十基が集まっています。モンゴル東部を中心に、中央部のハンガイ山脈、北部のロシア領バイカル湖周辺、南部のゴビ砂漠までの広い範囲に分布していますが、これらの墳墓は、同一文化に含まれると考えられています。板石を地上に方形に並べて築造され、面積は約二メートル×四メートル程度のものが普通です。地下五十〜百五十センチのところに板石を並べて作った棺内に、遺体の頭部を東向きにし、おお向けの状態で真っ直ぐに安置します。青銅製のナイフ・矢頭・装飾品、土器などの様々な遺品、家畜の頭部・足・肩甲骨などが副葬されることもあります。モンゴル国内で発掘、調査されたこのような墳墓はおおよそ五百ヶ所あり、紀元前一千年紀に年代付けられています。

バジリク文化

アルタイ山地に分布する初期鉄器時代文化（起源前七〜三世紀）。黒海沿岸のスキタイと共通する文化要素を持つ。墳墓の地下埋葬施設が凍結し、埋葬者の遺体・繊維製品・木製品が良好に保存される例が多いことも知られている。

ヒルギスオール モンゴル国土に分布しますが、その反面調査・研究例はさほど多くはありません。それは、この遺構は大量の石を用いて築かれたものであるため、発掘作業に時間と費用を要するためです。しかも、多くのヒルギスオールからは遺品・遺物の出土が少ないことも、調査例が増えない理由の一つです。ヒルギスオールは、中心に積石塚を築き、その周囲に石で方形、円形の囲みを築き、さらに小型の積石や石組みを配置することを特徴としています。積石塚内に埋葬施設を持つ場合があり、通常遺体の頭部を東に向けて埋葬しています。規模は様々ですが、大型のものでは直径百メートルを越えています。紀元前二千年紀〜一千年紀に年代付けられています。

バジリク文化の積石墓

モンゴル・ロシア・ドイツ共同調査隊は、二〇〇六年にバヤン・ウルギ県ウラーン・オス村の海拔二千五百四十九メートルの地点でバジリク文化（紀元前七〜三世紀）の積石墓を発見し、発掘調査を実施しました。この墓は永久凍結の状態にあり、積石の地下に長さ二・三メートル、幅一・七メートルの木室が設けられていました。木室の外側に、馬のハミや鞍などが完全に着装された二頭の馬が埋葬されていました。木室の内部には、身長約百七十四センチ、三十〜三十五才ぐらいの男性の遺体が葬られていました。毛皮の衣服、鳥の木彫の飾りがついたフェルト帽子、短い麻のズボン、フェルトのブーツをまとい、首に狼を描いた木の飾りをつけていました。胸部には、青色のイレズミが施されていました。遺体の頭部の傍らに、角・木製容器、土器、五本の矢、木製楯、鉄刀、フェルト袋にはいった青銅鏡、鬪斧、様々な模様が施された木製首飾り、ボタン、鳥・鹿・子馬などの彫刻が見付かり

ました。この永久凍結墓は、今から約二千数百年前に遡る、初期鉄器時代初期の内陸アジアの遊牧民の生活・文化を研究する上で、貴重な資料であるといえます。

匈奴墓 匈奴の墓は、貴族の墓と庶民の墓とに大別されます。貴族墓は面積が広く、墓の周囲を石で囲み、墓道も設けられています。まず地下に深さ八く十八メートルほどの竪孔を掘り、木郭・木棺などの埋葬施設を設け、そこに遺体を葬ります。施設内には、馬車や金銀の装飾品などの宝物、家畜などが副葬されます。地上には方形・円形の墳丘が築かれます。匈奴貴族の墓はトフ、アルハンガイ、ホフド、ヘンテイ県に分布し、通常一ヶ所に多数が築造され、墳墓群を形成しています。匈奴庶民の墓は地上で直径五く十三メートルの円形状の積石塚を築き、深さ一・七メートルの深さの竪孔を掘り、その内部に木棺や石棺を築き、そこに遺体頭部を北向きにして埋葬しています。

匈奴

戦国時代から漢代にかけて中国北方の草原地帯に位置した遊牧集団。紀元前三世紀に冒頓単于により統一され、遊牧国家を樹立し、強勢をほこった。しかし、紀元前二世紀の漢の武帝の攻勢以後は、内紛・分裂などにより勢力が衰えた。

匈奴墓の最新の研究成果として、トフ県ノヨンオール墳墓群の調査があげられます。モンゴル科学アカデミー考古学研究所とロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族学研究所による、共同調査隊が二〇〇六年に実施しました。発掘された貴族墓は、十八×十九メートルの方形板石に囲まれた墳丘と、十七・五メートルの墓道が設けられました。深さ約十八メートルの竪孔に、長さ六メートル、幅四メートルの木槨が築かれています。土圧や盗掘のために破損が見られますが、多くの副葬品が遺されています。木槨の天井はさらに五段の板石により覆われていました。天井の上には墓主の遺品と思われる傘付きの馬車と三十頭以上の馬の頭部が置かれていました。

発掘中に、銀製の山羊・羊・カモシカ、金製龍、古代グレコローマン風の男女裸像などの装飾品、青銅製車輿具飾り、鳥文が描かれたフェルトやカーペット、底部に漢字が書かれた椀など、総数二百点以上の遺物が出土しました。現在、遺物の修復作業が終わり、年代測定などの分析が行われています。

4. 鹿石

鹿石は、モンゴル・中央アジアに分布する青銅器時代から鉄器時代の記念碑的遺構です。縦長の石材を彫刻し三ヶ所に区切り、上部に太陽・月、中央に躍動感のある鹿群、下部に帯に武器をかけた様子を彫刻したものが典型的です。鹿の模様が顕著なことから、鹿石と呼ばれています。鹿石は、通常高さ一〇四メートル、厚さ二〇〜五十五センチ、幅三〇〜八十センチ程度の規模を持ち、一カ所に数基が集められています。周囲に石囲いが築かれるもの、ヒルギスオールや方形墓などが隣接するものがあります。鹿石はその文様から、(一) 鹿を主文様とするものと、(二) 鹿以外の動物(野生山羊など)が刻まれるものの二つに大別され、前者はモンゴルからバイ



カル湖東部、後者は南シベリア・アルタイ地域に主として分布しています。鹿石の研究は約百年前から始まり、これまでに約七百基が発見されていますが、その内の約五百五十基がモンゴルに存在しています。

5. 岩壁画

現在、モンゴルでは、旧石器時代から一五世紀にわたる二百ヶ所以上の岩壁画遺跡が発見されています。これらの岩壁画は、その画法から以下の四種に分類されます。

- 一 赤色顔料による図画
- 二 浅く掘りくぼめた彫刻画
- 三 鋭い線による刻線画
- 四 墨汁による図画

赤色顔料の代表的な岩壁画として、ウランバートル市近郊のイフ・テンゲル谷遺跡をあげられます。中央に円形や方形で囲まれた多数の点が描かれ、その上に羽を広げた鳥、下や脇には手をつないだ数人の人間、馬を引いて歩く人間などが描かれています。彫刻画はもともと多く見られますが、その大半は青銅器・鉄器時代に年代づけられます。特に動物を表現した岩壁画は、青銅器時代中期に始まり、鉄器時代の初期まで続きました。

6. 靈廟遺跡

古代突厥では故人を埋葬したあと、彼らの霊を慰める追善供養を行う参り墓を別に設けました。一般的な参り墓以外に、多くの要素から成る複雑な構成を持つ靈廟も築かれました。一般的な参り墓は、板石を縦に並べて、方形の箱状の囲みを築き、その左側に石人を置き、石人の正面から東南へ伸びる石列（バルバル）を築いたものです。このような遺構はヘンティ県からアルタイ山脈にかけて分布しています。靈廟は、突厥国家に貢献した可汗（王）・大貴族・將軍たちのために設けられたものです。可汗の靈廟は堀・塀で囲んだ区画の中に靈殿（瓦葺き基壇建物）を設け、正面に側近の官僚・家臣たち、獅子や羊などを映した石像や石碑を置いた、大型のものです。突厥時代の代々の可汗や王族たちの靈廟の多くは全て現在のモンゴル国内に遺されています。オルホン河流域のビルゲ可汗廟（七三五年没）とキョル・テギン廟（七三二年没）、ウランバートル郊外のトニユク廟（七二〇年没）などは代表的なものです。二〇〇〇年からトルコとの共同研究の一環としてオルホン川の谷にあるビルゲ可汗、キョル・テギン廟の発掘調査を行い、二〇〇一年に大変豪華絢爛な遺物が出土し、突厥研究史上極めて貴重な発見となりました。帯金具等の装飾金具・鹿形飾り・杯など十七種千八百七十八点の銀製品、王冠・皿・杯などの二十種七十八点の金製品、六種二十六点の宝石類が、現在は修復されて、モンゴル国立歴史博物館で一般公開されています。

突厥

紀元六〜八世紀に、モンゴル高原・中央アジアに根拠を置き、遊牧国家を樹立した集団。八世紀にはモンゴル国中央のオルホン川流域に根拠を置いた。トルコ語系の言語を話し、独自の文字を用いた碑文が多数残る。ことでも知られる。

7. 碑文

モンゴル国内には、文字が刻まれた各時代の碑文が多数遺されていますが、最古の碑文は突厥時代のものです。突厥が使用した三十八文字から成るトルコルン体文字（突厥文字）は、七世紀後半にモンゴルで作られたという説もあります。モンゴルでは、約五十の突厥文字碑文が存在しており、新たに発見されることもあります。突厥の後に建国したウイグルでは、初期には突厥文字を利用していました。その後、中央アジアの商業民族ソグド人から文字を導入し、自国に合わせて改良したものが、ウイグル文字として世界的に知られたものです。ウイグル帝国に臣属したトルコ系やモンゴル系の諸部族もウイグル文字を使用しました。代表的なドロドイン碑文は、一九五五年に考古学者ドルジスレンにより発見されました。八行のウイグル文を写真に撮影し解読を行った結果、八〜九世紀の古代ウイグル文字であることが判明しました。後のモンゴル帝国時代には、ウイグル文字はモンゴル帝国の文字として公式に採用されました。このことは、当時の文化を促進させる革命的な出来事だったといえます。モンゴルに現存する碑文の中には、このモンゴル文字で書かれたものが多数あります。カラコルム碑文、ムンフ・ハーン碑文、ビチグティン・ゴル碑文、ツォグト・タイジ・ドート・ハル碑文などが代表的なものです。セルヴェン・ハールガ碑文は、ヘンティ県バヤンフタグ村で発見されました。互いに約十五メートル離れた二ヶ所の岩壁に、それぞれ漢文と女真文文章が刻まれています。一九九一年のモンゴル・日本共同研究プロジェクト「ゴルバン・ゴル」調査の成果です。後に加藤晋平教授や筆者らの精密な検討に

より、正確な位置や漢文の内容が明らかにされ、海外の研究者達の注目を引くことになりました。長い年月、厳しい自然環境の影響を受けた為、碑文は色あせ、中には欠けている部分もあり、調査がかなり困難な状況でした。しかし、モンゴル・日本共同研究プロジェクト「新世紀」調査隊の研究者達が度々現場を訪れ、写真や拓本で記録をとることに成功しました。『金史』、『元朝秘史』などの史書との比較検討により、金国の王京丞称（完顔襄）とチンギスハーン、トオリルハーンらが連合を組み、タタールのメグジン・セウルトを滅ぼした戦闘の勝利を記念して作った碑文である事が明らかになりました。この碑文には戦いが一一九六年に行われたことが記されています。チンギスハーン初期の活動を明らかにする重要な碑文であり、保存対策が重要課題ですが、モンゴルと日本の考古学者達の提案により、両国の共同による保存・修復計画が実施される運びとなったことは、大変喜ばしいことです。

8. 都市遺跡

モンゴルには、匈奴、ウイグル、契丹、モンゴル帝国、帝国崩壊後から満州支配下時の各時代の都市遺跡が約三百ヶ所存在しています。最古の物は紀元前二世紀〜紀元一世紀に存在した匈奴のもので、匈奴の都市遺跡は、厚い城壁を方形に囲み、中に建物を設けるのが特徴です。その後は、八〜九世紀に存在したウイグル帝国時代に大規模な都市が建設されました。代表的な遺跡は、アルハンガイ県ホトント村に位置するウイグル帝国の首都であったハル・バルガス（古代ウイグル語のオルド・バリク）です。

王宮を城壁で囲み、南北に大門が設けられ、城壁には多数の塔が築かれています。大部分が破損していますが、城内の中心の大型建物、高さ十四メートル、六百メートル四方の城壁がよく保存されています。一〇〜一一世紀初期に、モンゴル高原を支配下においた契丹国も、大規模な都市を建設しています。ヘルン川流域に建設されたズーン・ヘルム城址、バローン・ヘルム城址、バルス・ホト城址では発掘調査が行われています。バルス・ホトには、レンガ積み of 七重の仏塔が遺されていますが、保存状況が悪く、保護が必要とされています。オノン川流域のウグルクチン・ヘルム城址は、石積の城壁を、山稜にめぐらした山城です。城壁は比較的破損度が低く、城壁の積石がよく保存されています。出土した陶器の破片から契丹時代の城址であることが明らかになりました。城壁の周長約三キロ、南北に門の跡があり、内部には土を盛り上げた建物基壇跡が残存しています。

モンゴル帝国時代にも都市建設は盛んに行われました。カラコルム遺跡は、モンゴル帝国第二代のオゴタイハーンが築いたモンゴル帝国の初期の都です。一九九九年からモンゴル・ドイツ共同調査隊が、カラコルム都市遺跡においてオゴタイハーンの宮殿跡、商工業地区の発掘調査を行いました。レンガの窯址、工房跡が発掘され、腕輪と鋳型などの青銅器・鉄器、三百枚以上の銅銭、モンゴル文字の刻まれた銅板（一三七二年の紀年）などの珍しい遺物が出土しました。アウラガ遺跡は、ヘンテイ県デルゲルハーン村に位置するアウラガ川の流域に存在するチンギスハーンの初期の**オルド**の遺跡です。調査は、二〇〇一年からモンゴル科学アカデミー考古学研究所と日本の新潟大学・国学院大学との共同研究であ

オルド

ハーン（王）や后妃の居所を指す言葉。幕営地やその経営の実務組織を含む意味にも用いる。

る「新世紀」プロジェクトにより開始され、現在も研究は継続されています。アウラガ遺跡は東西千二百メートル、南北五百メートルの規模を持っています。発掘は、まず遺跡群の中央北部に位置する囲壁で囲まれた「建物一」で行われました。その結果、層位から三期の変遷が確認されました。最下層がチングスハーンのオルド、中層はオゴタイハーン時代のオルド、最上層は元朝の時代に建設された大ハーン達の霊廟と考えられます。この他に、鉄鉱石の選別・加工場、武器工房などの鉄製品の製作場、中央通り沿いの飲食店や商店跡と思われる遺構も発見されました。今後も、毎年の発掘調査により、当時の都市の様子がより明らかにされるものと期待しています。

9. 石人

モンゴルの山地や草原に広く分布する遺跡の一つに、石を彫刻して人間を表現した「石人」と呼ばれる石像があります。石人の調査は一九世紀末から開始され、現在では五百以上の石人が発見されています。石人には六〜九世紀の突厥・ウイグル時代のもの、一三〜一四世紀のモンゴル帝国時代のものに大別されます。その約八割は突厥・ウイグル時代のもので、直立した姿のものや、あぐらをかき右手に杯、左手に剣を握る姿のものが多く見られます。ほとんどの石人には、足が表現されていません。著名な可汗たちの霊廟などの大型遺跡には、多数の石人が設置されています。

モンゴル帝国時代の石人はモンゴル東部を中心に分布しています。帝国時代の石人の帽子、デール、

帯、靴、容器、ナイフ、剣、装飾品、椅子、髪の毛などの表現は、まったく突厥時代の石人と異なっています。モンゴル東部に分布する全ての石人は、衣服の襟を左前にし、身丈が長く、袖が細く、靴の先は尖り、あるいは先端が上がっています。このような様子は、一三〜一四世紀のモンゴルの衣服に関する文献の記載や絵画資料に表現されたものと一致しています。シヨンホ・タバンのトルゴイ、ラムト、オンゴン・タバンのトルゴイの石人は、中世のモンゴル男性の顔つき、髪型、衣装、装飾品、玉座などを示す代表的な事例であるといえます。特に、オンゴン・タバンのトルゴイの二つの石人は頭部が破損しているものの、作りが繊細で、かつ人体を正確に表現している代表的な作品です。

モンゴルに存在する様々な考古遺跡、それらの最新の研究結果に付いて簡単にご紹介いたしました。近年モンゴルでは、鉱山開発事業やインフラ整備事業の影響により、多くの古代遊牧文化の貴重な遺跡の運命が危険にさらされている実状があります。今後、歴史・考古学的遺産の保存、保護問題は、我々の大きな課題となっていくことでしょう。

最後に、モンゴルの考古遺跡の研究・紹介・保存・保護と若手研究者の育成に、二十年間に渡り携わり、誠心をかけ知識と技術を提供し、今も尚ご指導とご支援をしてくださる日本の諸先生方に、その多大なる貢献に対してモンゴル科学アカデミー考古学研究所の一同を代表して心から感謝を申し上げます。

遼祖陵園遺跡の考古学的新発見

中国社会科学院考古研究所研究員・東北学院大学大学院客員教授 董 新 林

祖陵は遼の初代皇帝である耶律阿保機と皇后の陵墓であり、天顯二（九二七）年に造営されました。これは中国内モンゴル自治区巴林左旗の林東にある遼の首都・上京の西方の山谷に位置し、その南東には奉陵制に基づいて造営された奉陵邑（帝陵祭祀のための都市）である祖州城があります（図1）。

二〇〇三～二〇〇四年に中国社会科学院考古研究所内モンゴル第二チームは、祖陵の陵園遺跡と周辺の関連遺構の全体に対して踏査・調査を実施し、重要な成果を挙げました。これに基づき、そして中国国家文物局の支援を受けながら、二〇〇七年には中国社会科学院考古研究所と内モンゴル文物考古研究所は合同で祖陵考古チームを組織し、陵園内の1号陪葬墓（図2、

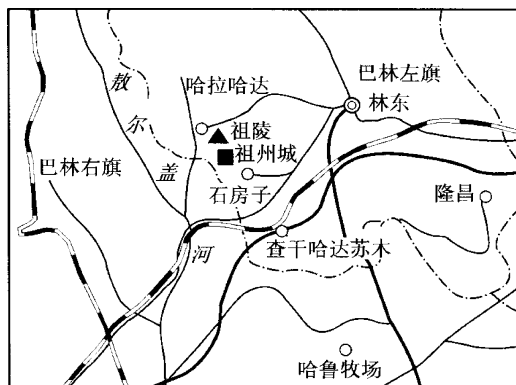


図1 遺跡位置図

5、9、10、13）と
 陵園外南門外の東方
 の亀趺山にある「太
 祖紀功碑楼」(太祖の
 功績記念碑を置く建
 物) 基壇跡(図3、
 4、6、12) に対し
 て、保護を目的とし
 た緊急発掘を行いま
 した。二〇〇八年に
 は陵園内の甲組(1
 号) 建物基壇跡に対し
 て、保護を目的とし
 た発掘調査を行いま
 した(図7、11)。二
 〇〇九年には陵園の
 正門「黒龍門跡」と
 三地点の主要な建物
 基壇跡に対して試掘
 を行い、併せて陵園
 内全体に対してボー
 リング調査を行い、
 重要な実物資料を
 得ることができま
 した。

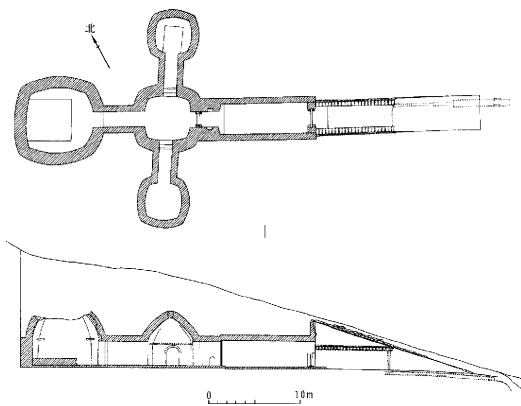


図2 1号陪葬墓 (PM1) 平・断面図



図4 亀趺山建物基壇跡出土碑片 (漢字) 拓本



図3 亀趺山建物基壇跡出土碑片 (契丹大字) 拓本



図6 亀趺山建物基壇跡
(空中撮影、右が北)

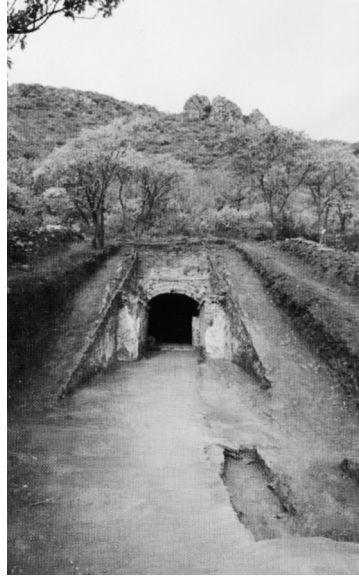


図5 1号陪葬墓 (東南から)



図7 甲組(1号)建物基壇跡 (空中撮影、上が北)

内蒙古巴林左旗遼代祖陵園遺跡



図 11 甲組建物基壇跡 J1 の
石僧人像出土状況



図 8 祖陵玄宮附近の石像出土状況
(北から)

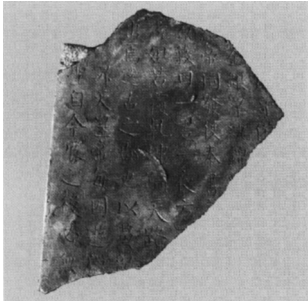


図 12 亀趺山建物基壇跡出土
の漢字石碑片

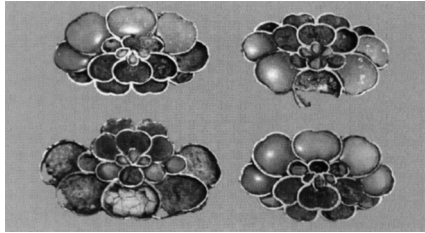


図 9 宝石象嵌銀製装飾品
(PMI : 231-1~4)

内蒙古巴林左旗遼代祖陵園遺跡出土遺物

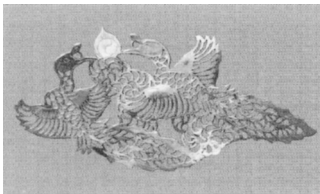


図 13 塗金双鳳銀製装身具
(PMI : 239)

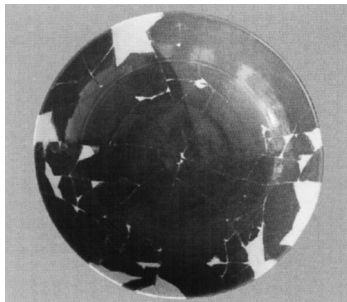


図 10 双鳳文青磁 (PMI : 134)

遼代帝陵の埋葬制度に関する文献資料上の記述は簡単なものであるので、考古学的調査と発掘資料は、遼代帝陵の埋葬制度を考える上でもっとも重要な根拠となります。こうしてわれわれのチームは調査と発掘によって、遼代帝陵の埋葬制度について以下のような新たな見解をある程度得ることができました。

1. 祖陵陵园の南東部には、奉陵邑である祖州城があります。そして、陵园の正門「黒龍門」外の東方、西方、南方には、「太祖紀功碑楼」のような祭祀建築があります。さらに陵园の山谷には、まだいくつかの陪葬墓があると推定されます。

2. 陵园内の施設・建物の選地は、地勢と水勢（風水）が重視されていました。祖陵の陵园はポケット状の谷地形に位置し、その四方は山で囲まれています。祖州城寄りの南東方向で谷がわずかに開口したところに「黒龍門」があり、現在は門闕の基壇跡だけが残存しています。試掘調査によれば、「黒龍門」は元来三つの門道をもった木造建築であったことが判明しました。陵园の南方にはシャリ河をはさんでマンチガ山があり、また陵园の四方の山の稜線で窪んでいるところを石積みの壁でわざわざ閉塞したことは、陵园の境界を示すだけでなく、陵园内の気を外界に流失させないという風水制度と関係するでしょう。

3. 祖陵の陵园は、内陵区と外陵区に大きく区分されます。つまり、北部は太祖・阿保機の陵墓がある内陵区で、南部は陪葬墓がある外陵区です。試掘と地表調査によって、西方の山稜から東へ半島状に伸びる「南嶺」（『遼史』に所載）の尾根筋にある石壁は、尾根上にある2号建物基壇跡に繋がっており、さら

に東の谷底の平場にある甲組建物基壇跡にも繋がっており、東西方向の遮蔽施設となっていたことが具体的にわかります。これは陵域の南北の区分線でもあります。

4. 太祖陵の墓室（玄宮）は、山を削って構築された『遼史』にあり、内陵区のほぼ中央に位置しています。さらに墓室を覆う墳丘付近には、人物と犬の石像物が置かれていました(図8)。甲組建物基壇跡は太祖の墓室東南に位置し、そこから「南嶺」へ登るための通路、および「南嶺」の尾根上に建てられた2号建物基壇跡と有機的な関係で構成されており、太祖陵を祭祀するためのもつとも重要な帝陵建築の一つであったと推定されます。なお、1号陪塚墓の南東部にも、祭祀建物の基壇跡があります。

1～4の新発見とその理解は、『遼史・地理志』に記載されている「太祖陵鑿山為殿、曰明殿。殿南嶺有膳堂、以備時祭。門曰黒龍。東偏有聖踪殿、立碑述太祖游獵之事。殿東有樓、立碑以紀太祖創業之功。」と基本的に一致するものです。

5. 祖陵の陵园の施設・建物配置は、漢代から唐代までの帝陵制度の根幹を継承しながら、遼独自の特徴ももっています。このような陵园配置は、遼・懐陵にも継承され、ともに陵代前期の陵园配置の代表的モデルとなっています。したがって陵代の帝陵制度は、中国古代の帝陵制度の研究において重要な位置を占めているといえます。

以上述べてきた近年來の祖陵における地表調査やボーリング調査、そして発掘調査によって得られた

成果は、遼代考古学に関する重要発見の一つです。これらの成果は、文献資料の記述の少なさをかなりの程度補足し、遼代前期の帝陵制度の研究上の空白を補填しました。そして、中国古代の帝陵制度、および遼代の考古学と歴史学についての研究を前進させたといえます。また、国家文物局が審査して決定する『「祖陵」大規模遺跡保護基本計画』の策定に対しても、科学的な根拠を提供することになりました。なお、詳細を知りたい方は、『考古』二〇〇九年第七期をお読み下さい。

(佐川正敏 訳)

八〇〇〇年前の内モンゴルの生業を探る — 西遼河流域を中心に —

東北学院大学文学部教授 佐川正敏

1. 北アジアと東アジアが交錯する西遼河流域

遼の首都・上京遺跡や祖陵遺跡がある内モンゴル赤峰地区には、シラムレン河などの西遼河の多くの支流が流れ、遼寧省内で遼河に合流し、渤海湾へと注ぎます(図1右)。西遼河流域の南側に東西に走る燕山山脈を越えると華北平原に至り、西遼河流域の北側から北方へ連なる大興安嶺山脈は、東北平原とモンゴル高原を東西に分ちます。したがって、西遼河流域は北アジアと東アジアが微妙に交錯する位置にある、という点で重要なのです。

西遼河流域は中国北方の新石器時代研究の重点地区でもあります。それは、日本列島の旧石器時代末期から縄文時代草創期(北海道帯広市の大正3遺跡の時期)にあたる土器や弓矢、竪穴住居

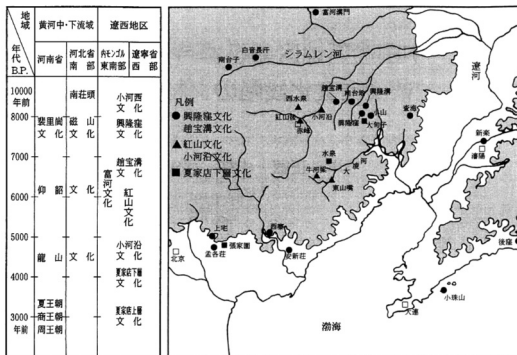


図1 西遼河流域の新石器時代遺跡の分布と年代

の使用開始の段階は、いまだ不明ですが、西遼河流域では今から八〇〇〇〜七〇〇〇年前（縄文時代早期に相当）の興隆窪文化期以後の趙宝溝文化期、紅山文化期、小河沿文化期という考古学的編年の大綱が、中国北方で唯一確立しているからです（図1左）。今回は筆者が参加している興隆窪文化の中日共同研究（中国社会科学院考古研究所と青森県教育委員会などによる）の成果を報告しながら、西遼河流域の八〇〇〇年前の生業の特徴について検討します。

2. 興隆窪文化とは

興隆窪文化は赤峰市東端の興隆窪遺跡を標式とし、西遼河流域に分布します。その特徴は、①集落に環壕があるものとなないものがあり、方形竪穴住居が列状分布をなす（図2）、②貯蔵穴は主として住居群の外周に分布する、③土器は円筒形に近い平底深鉢が主体で、口縁・頸・胴部に文様帯があり（図3上）、乱雑な短斜線文交差文などから規則的な之字（ジグザグ）文や幾何学文などへ変化、④石器は弓矢（鏃）がなく、細石刃を嵌め込んだ銚・槍先形植刃器が主要な狩猟具であり、土掘り具の打製・磨製石鋏、製粉具の棒状磨石と石皿のセットが安定して存在（図3上段）、

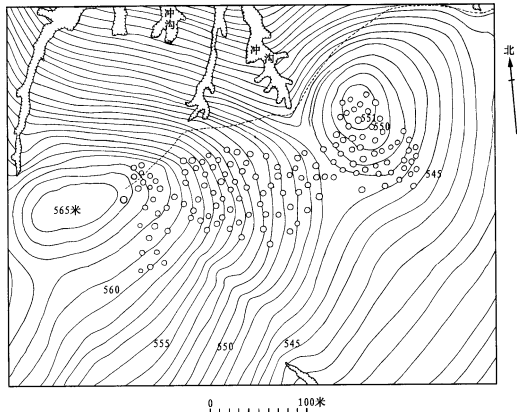
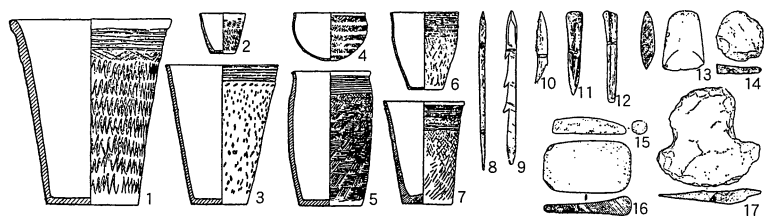


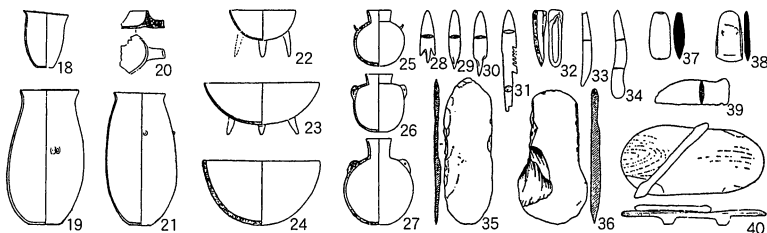
図2 興隆溝遺跡の竪穴住居跡の列状分布

⑤生業はイノシシとシカを中心とする狩猟や堅果類の採集を主体とし、キビとアワの栽培も行った、⑥玉製球状耳飾(図4)、玉製匙形ペンダント、玉製斧は初期の玉器とされ、華北に先行した、⑦イノシシ崇拜の風習があった(図5)、⑧シラムレン河以南には屋内墓の風習があった(図6)、などです。この段階の気候は温暖湿潤で、赤峰市周辺にもスイギュウが生息していたほどです。ちょうど縄文海進期にあたります。

この段階の華北平原(黄河中・下流域)には、裴李崗文化や北辛文化が広がり、円形住居で生活し、石鋤を起耕具とする畑作農耕を主生業とし、深鉢・鉢・壺に分化した素文土器を使用し、棒状磨石と石皿で穀物を製粉し(図3下段)、集落外墓地に埋葬され、比較的平等な社会であったと考えられています。北・東日本では尖底の貝殻・沈線



1~7: 土器、8: 骨製ヤス(1/6)、9: 骨製鋸(1/6)、10: 植刃鋸(1/6)、11-12: 骨篋(1/6)、13: 石斧、14: 円盤形石器、15: 棒状磨石(1/24)、16: 石皿(1/12)、17: 扁平打製石鏃(16は南台子、ほかは興隆窪出土)



18-19-21~27: 土器、20: 土製匙、28~30: 骨鏃(1/6)、31: 骨鋸(1/6)、32: 骨篋(1/6)、33-34: 骨製ナイフ(1/6)、35-36: 石鋤、37-38: 石斧、39: 石鎌、40: 磨石・石皿(1/24) [28~34は磁山、ほかは裴李崗出土]

図3 興隆窪文化(上段)と裴李崗文化(下段)の生活用具

文土器が広く使用され、道南では植物質食糧への依存度の高まりを示す磨石と石皿のセットがまもなく出現し、道東では石刃鎌文化がまもなく沿海州から到来しました。

3. 狩猟が文化的基層を形成

興隆窪文化期の生業の主体は狩猟であり、イノシシやシカは食糧の中心でした。そして、イノシシの頭骨だけが頭頂部を穿孔され(図5)、神聖な空間である住居北辺に置かれたり、男性墓に手足を縛られたオスとメスのイノシシが副葬される(図6)など、イノシシ崇拜の風習もありました。こうした風習はこの地域で存続し、今から六〇〇〇〜五〇〇〇年前の紅山文化期に隆盛し、装身用の各種のイノシシ形玉器が製作され、副葬されました。ちなみに、北日本の縄文時代後期(今から約四〇〇〇年前)にもイノシシ形土製品が突然作られ始め、縄文人によってイノシシがシカよりも高く位置付けられていたと

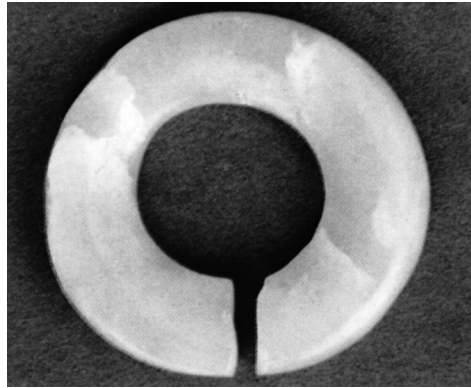


図4 興隆窪遺跡出土の玉製玦状耳飾



図5 興隆溝遺跡竪穴住居跡に残されたイノシシ祭祀

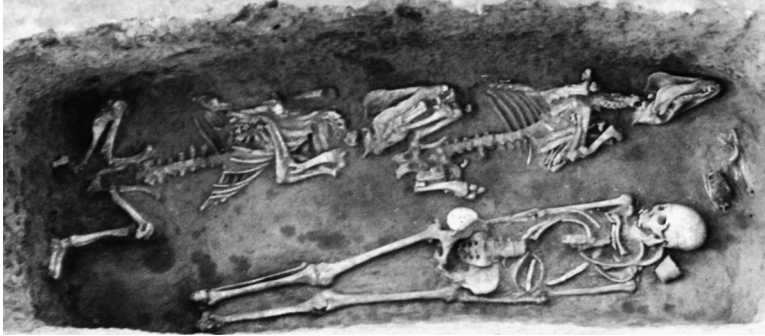


図6 興隆窪遺跡の屋内墓の男性遺体と副葬されたイノシシ

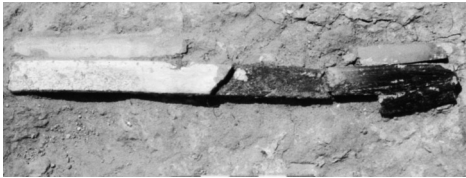


図7 興隆溝遺跡竪穴住居跡出土の銛先形植刃器

推定されます。

日本では縄文時代の始まりとともに衰退・消滅した細石刃は、北アジアでは使用され続けました。興隆窪文化期の遺跡では、ただの一点も石鏃や骨鏃が出土しませんので、細石刃を嵌めた銛・槍先形植刃器が依然としてもっとも重要な狩猟具でした(図7)。これと細石刃がともに男性の最重要労働である狩猟を象徴していたことは、

副葬品や葬送儀礼(男性の頭に細石刃を撒く)に使用されたことからわかります(図6)。狩猟は、興隆窪文化期の物質・精神文化の基層を形成するものであったといえます。

4. 畑作農耕のはじまり

興隆溝遺跡は興隆窪文化に属し、日中共同研究の対象として二〇〇一〜二〇〇三年に発掘されました。竪穴住居の埋土をすべ

て篩に掛け、微細な遺物を極力採取し、また水洗選別して植物種子の採取に努力した結果、ある豎穴住居の床から大量のキビと少量のアワの炭化種子が発見されました。中国の植物考古学者の趙志軍氏がこれらを分析した結果、初期の栽培種と鑑定されました。興隆窪文化期にすでにどの住居でも安定して使われていた石鋏、そして棒状磨石と石皿のセットは、畑作用農具とキビやアワの製粉具だったのでしよう。

初期畑作農耕が確認された意義は確かに大きいです。しかし、石鋏、磨石、石皿は墓に一切副葬されておらず、狩猟の社会的・文化的位置づけとは大きく異なります。人骨の炭素・窒素同位体分析も必要ですが、キビやアワは当時の食糧全体において、まだ主体的存在ではなかったのだでしょう。

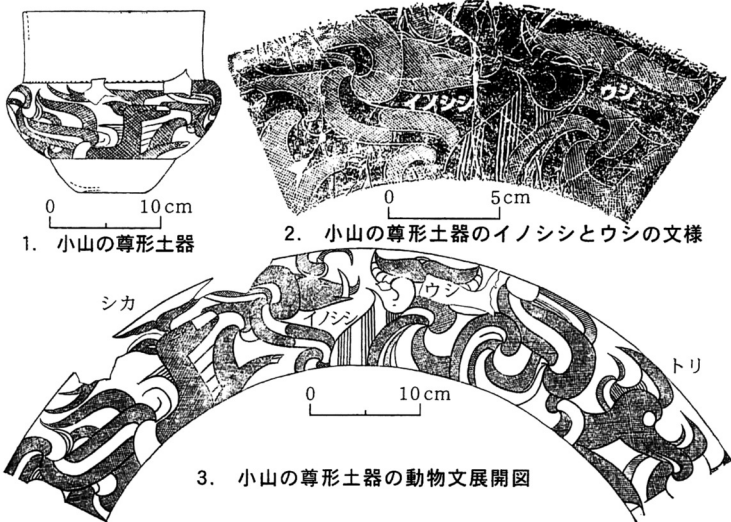


図8 趙宝溝文化期の動物文尊形土器

5. 境界領域としての西遼河流域

興隆窪文化期に続く趙宝溝文化期になると、土器の器種分化（多様化）が進み、起耕具である石鋤が出現し、華北平原からの畑作技術の大きな受容が伺えます。一方で、野生動物を文様として土器に描く狩猟文化の伝統も、依然根強く残っています（図8）。さらに、同時期の周辺遺跡（赤峰市富河溝門や遼寧省瀋陽市新樂）では、石刃鏃をもった集団の南下も認められます。この現象は、東アジアと北アジアの境界領域にあるこの地域に、主生業を異にする集団がモザイク状に共存していたことを示しています。

図版出典

図1、3は筆者作成。図2は『考古』二〇〇〇年第九期。図4、6は『考古』一九九七年第一期。図5は『文物天地』二〇〇二年第一期。図7は『文物天地』二〇〇三年第一期。図8は『考古』一九八七年第六期。

モンゴル中世城郭の比較考古学

奈良大学文学部教授 千田嘉博

1. なぜ城郭の比較考古学なのか

わたくしの報告タイトルは、比較考古学としています。なぜ比較考古学なのか、まず報告者の視点を明らかにしておきたいと思います。地球のさまざまな国と地域にはそれぞれの歴史を反映した城郭が築かれました。日本の城郭が武士や侍のイメージと強く結びついているように、世界の城郭はそれぞれの国や地域の歴史と深く結びついて語られています。それはごく、あたりまえのことですから、わたしたちはふつう疑問を感じることはありません。もちろん城を通じて国や地域の歴史を読み解くことは間違いではありません。しかしわたくしは城郭がもった歴史性を国や地域史の資料として還元するだけでなく、比較研究によって巨視的に考えることで、城郭の発達に共通性や法則性を見いだして、相対的な関係を把握して評価することが重要だと考えています。

そう考えるのには理由があります。日本の城郭を日本の視野だけで考えることで、見えなくなっている問題があると思うからです。日本の城郭研究の歴史を遡ってみると、第二次世界大戦中に、「日本の城

郭は武士道精神の精華であって、独自のものであり、守るためではなく攻めるためのもの」といった極端な評価が行われていたことがありました。たとえば戦時中から戦後にかけて城郭研究や天守の復元研究・設計に活躍した建築史家の城戸久は、日本の城郭は防御のためではなく、武士道による攻撃精神に満ちた特別なもので、それが戦争を進めている皇国の兵士の武勲を受け継がれているとしました(城戸久『城と要塞』朝日新聞社、一九四三年)。

日本の城郭が防御のためではなかったという城戸の評価の根本に大きな誤りがある上に、日本の城郭構造に、侵略戦争につながる精神的源流が内在しているという城戸の説は、戦時中という特殊な状況であつたとしても、とうてい認めることはできません。今日ではこのような歴史観にもとづいて城郭を研究する人はいません。しかし城戸の考え方の根底にある国粹主義的な意識は、城郭研究にとって完全に過去のものとはいきれないのです。

「最大」や「最強」といったフレーズで地域の城郭を立派なものとして語る行為は今でも一般的です。地域の城跡を誇りに思うことはすばらしいことですが、往々にしてそれはお国自慢や地域の小さなナショナリズムと不可分の関係にあります。そして学問領域でも「加藤清正が築いた名城」、「織田信長の独創的な築城」のように、無意識に日本の枠の中で説明をつけて、わかったことにははいないでしょうか。

もちろん、そうした説明は間違いではありません。しかし石垣を構築したのは日本の城郭だけではなく、複雑な出入り口や張り出した櫓台を城壁に設けて守りのくふうをしたのも日本の城郭だけではありません。

ませんでした。地球規模で共通して起きた城郭の発達過程を、国や地域の政治的・地理的境界に従って、その国や地域の歴史に還元して読み取るとともに、その変化の背後にあった人類と城郭の歴史に共通した一般法則を説明する視点をもつことも、必要だと思うのです。

一般法則を念頭に置いた研究は、第二次世界大戦以降に歴史研究として新たに立ち上がった城郭研究にもっとも欠けていた部分だと思います。こうした視点をもたなければ、日本の城郭の発達過程が特異なものであったのか、普遍的なものであったのかを評価できません。それでは日本の城郭を特別視する評価から抜け出せないのです。世界の城郭と日本の城郭とを物質資料として比較して、はじめて日本の城郭発達の中に人類史に共通した普遍性を見いだすことができるのではないのでしょうか。

日本の城郭を世界の城郭の中で相対化して理解することで、すでに日本の視点の枠組みで評価したことも、まったく別の視点から意味を捉えることができます。たとえば織田信長が築いた安土城では、外枳形と呼ぶL形の石垣を築いて、効率よく守り、効率よく攻め出せる出入り口を実現していました。日本城郭史の視点では、定型的な外枳形は安土城にはじまり、その後、各地に成立した近世城郭に取り入れられて近世城郭を特徴づける要素のひとつになったとまとめられます。

しかし世界の城郭の中で安土城に現れた外枳形を、どう評価してよいかには日本城郭史の視点からでは答えられません。実は後ほどモンゴルの城郭都市に関して分析するように、L形の突出城壁を出入り口の前に設ける防御のくふうは、安土城の成立のはるか前から世界中の城郭が用いた普遍的なものでし

た(千田二〇〇九)。日本では確かに織田信長の安土城で創出された防御のくふうでしたが、それを人類史上で見れば、普遍的なグローバルスタンダードに日本の城郭が到達した瞬間だった、といえるのです。

これまでも歴史研究の分野ではアジアやヨーロッパとのさまざまな比較研究が行われてきました。そうした研究が果たした役割は大きなものでしたが、理念的な事象の比較ではなく、具体的な物質資料や空間の比較研究は遅れています。考古学は、物質資料(遺跡・遺構、遺物)をもとに研究していますので、国・地域の壁を越えた比較研究に適しています。札幌学院大学の総合研究所では、鶴丸俊明先生を中心にモンゴルの旧石器文化研究を推進され、アジアからグローバルな視点での比較研究に取り組んでおられます。また臼杵勲先生はロシアの極東地域からモンゴルにかけて広大な地域の中世考古学で大きな成果を挙げておられます。さらに山越康裕先生は、言語学の視点からやはり実証的な比較研究を重ね、シネヘン・ブリヤート語研究における第一人者とお聞きします。

こうした札幌学院大学の国際的で重層的な取り組みは、人文学研究の理想的なあり方といえます。今回のシンポジウムでも日本だけでなく、モンゴルと中国の研究者が加わって議論を深めることができたのは、札幌学院大学がもつ研究視野の大きさと、知的なグローバル・ネットワークがあればこそ、と思います。

本日の報告は比較考古学の視点から、モンゴルにある一一世紀の契丹(遼)時代の城郭都市を取り上げ、ヨーロッパや日本の城郭と比べて、人類史的な位置づけを考えて見たいと思います。

阻下(そぼく)は、タタール部族に属した遊牧民のひとつで、契丹(遼)にしばしば反旗を翻した。

馬面

馬面(ばめん)とは、城壁に迫った敵に対して側面から防射するための城壁の張り出し。日本では側面からの防射を特に「横矢」と呼んだ。攻城者の側面を狙うため、防御の効果が高かった。日本の城郭では弥生時代の紀元後三世紀に吉野ヶ里遺跡・北内郭の塁線に設けた櫓台の張り出しが知り得る最古の事例。世界史的にはギリシャのシロス島にある紀元前二四〇〇年のカストリ(Kastri)遺跡に馬面

2. モンゴル中世城郭を比較する

(1) ハルブヒン・バルガス

それではモンゴルの契丹(遼)時代の土城について比較研究を進めていきます。「遼史」によりまずと、一〇〇四年に契丹(遼)は、遊牧民の阻下(そぼく)の攻撃に備えた西方の防御拠点として鎮州城、防州城、維州城を築き、二万余騎を屯田兵として駐留させました(白杵 勲・A エンフトル『チントルゴイ城跡の研究I』モンゴル科学アカデミー考古学研究所・札幌学院大学総合研究所、二〇〇九年)。これから検討する城は、その三つの城に相当すると考えられています。

ハルブヒン・バルガスは、東西八〇〇m×南北七〇〇mの規模で方形に囲郭をめぐらしました(図1)。囲郭は版築の城壁と、その外側に堀を組み合わせており、城壁には馬面を備えていました。出入り口は甕城(外枳形)の形態でした。中国では紀元前四〇〇〇年ころにはすでに初源的な甕城が認められるように、ひじょうに

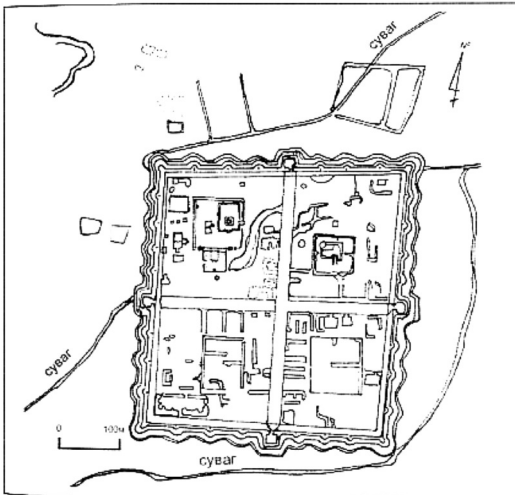


図1 ハルブヒン・バルガス(ツェヴェンドルジ 監修『ハル・ブフ城跡とトーラ川流域の契丹都市・集落』2005年より)

が認められ、エジプトにあった紀元前一八〇〇年の城郭ブーヘン(Buhen)の城壁には、等間隔で密に配置した馬面があった(Ian Shaw 1991, Egyptian Warfare and Weapons, Shire Egyptology, Shire Publications)。

甕城

甕城(おうじょう)とは、防御にくふうした出入りの一形態。城壁外へ塁線が突出して城道を屈曲させるとともに、城門の前後に特別な広場を備えた。四角い甕城だけでなく、半円形の甕城もあった。日本の城郭では外枳形に相当した。馬面で紹介したカストリ遺跡では、張り出した馬面のひとつ

早くから甕城(外枳形)が成立しました。そして契丹(遼)国の中心であった遼上京(図2)、中京や祖州城などにも外枳形が見られます。中国での甕城が契丹(遼)時代にさかのぼって成立していたことから、モンゴルに見られる甕城は、モンゴルで独自に獲得されたというより、伝播的に獲得されたものと評価できます。

(2) チントルゴイ・バルガス

チントルゴイ・バルガスは一〇〇四年に契丹国が設置した鎮州城に相当する城郭都市と比定され、城壁の大きさは東西六五〇m×南北一二五〇mで、南北に二城が並ぶ形態をとりました(図3)。実際には城壁外の周囲にも市街が広がり、また北城の北側城壁の北側一三〇〇mほどにある丘陵上に、烽火台と礎石建ちの離宮もしくは寺院と思われる施設があったように、都市域の範囲は囲郭を越えて広大でした。南北に二城が並び立つ都市プランは、ほかの二城に



図2 中国 遼上京の甕城(手前の城壁)と城壁の馬面

に出入り口を設けて、壘城としていた。馬面のひとつが壘城として機能した同様の事例は、沖縄県にある一五世紀の糸数グスクにも見ることができ。

は見ることができません。特筆すべき点です。

皇城に相当した北城の北端には宮殿(官衙)施設と寺院が並び立ち、街区は条坊制をとり、都市設計の基準尺は日本の平城京と同じ唐尺をもちいていました(白杵 勲・A エンフトル

『チントルゴイ城跡の研究I』モンゴル科学アカデミー考古学研究所・札幌学院大学総合研究所、二〇〇

九年)。また城外の南には瓦と土器を焼いた窯がありました。このようにチントルゴイ・バルガスは、多くの軍人、職人・商人が集住して、きわめて高い政治機能と経済・生産機能をもち、この地域における中心地機能を発揮したこと考えられます。

チントルゴイ・バルガスの囲郭は堀と城壁の組み合わせで、城壁には馬面を規則的にもちました。出入り口はいずれも壘城(外枳形)を備え(図4)、先のハルブヒン・バルガスと共通した防御施設で設計されたことがわかります。遺跡は基本的によく残っていますが、過去の航空写真と現状とを比べると、急激に城壁の版築



図3 チントルゴイ・バルガス(白杵・エンフトル・千田ほかによる)

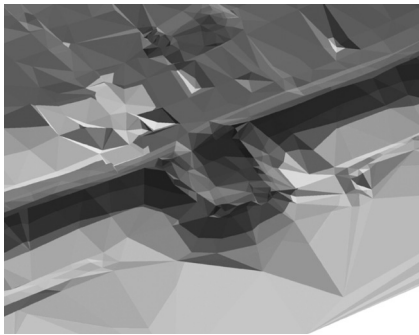


図4 チントルゴイ・バルガスの壘城(外枳形)

土の流出と堀の埋没が進んでいるようです。おそらく地球環境の変化が影響を与えているのではないかと思います。今回はくわしくお話しできませんが、未来に向けて遺跡をどのように保護していくかも大きな課題です。わたくしたちの調査は、そうしたところまで、何らかの方法を模索できればと考えています。

③ ウランヘレム・バルガス

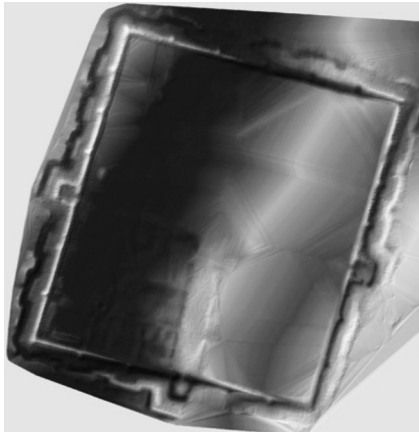


図5 ウランヘレム・バルガス
(前川 要・山口欧志による)

ウランヘレム・バルガスは東西四〇〇m×南北四〇〇mの規模で(図5)、城外の西側に中央に塚がある四つの四角い土塁の囲みがありました(墳墓跡かと思われます)。やはり紀元後一二世紀〜一二世紀にかけて、阻卜(そぼく)に備えた契丹国の北方防衛の拠点城郭と位置づけられています。その点では先のハルブヒン・バルガス、チントルゴイ・バルガスと変わりません。しかし防御施設の組み立てをくわしく見ると、ふたつの城とは大きく異なった守りのくふうがあったことが読み解けます。

まず囲郭は主城壁直下に帯曲輪を組み合わせた点に違いがありました。つまり堀が主城壁の直下にあったので

はなく、帶曲輪を挟んだ先に設置していました。これは堀と主城壁の間の帶曲輪を置くことで、敵が突入してきたときの進退を阻害し、主城壁から弓矢や弩、投石などを用いて効率的に敵兵を殺傷するためのおくふうだったと考えられます。

そして主城壁の馬面は、この帶曲輪に向かって張り出したので、馬面上からの攻撃はきわめて大きな効果を発揮しました。また甕城は帶曲輪を越えてその先の堀の位置まで大きく突出していた点も重要な変化といえます。甕城が大きく堀のラインまで張り出したことで、甕城が出入り口を守る拠点としてだけでなく、それぞれの城壁の防御拠点としても機能したのです。一般化して理解すれば、甕城が出入り口防御の施設から、城壁防衛の要であった門塔へと進化したといえます。甕城が堀底へ横矢を掛ける位置まで突出したことで、主城壁の馬面からの横矢と合わせた二重の横矢システムとなりました。強力な防御機能をウラン・ヘレム・バルガスは備えたのです。

このように同じ契丹（遼）の時代に属したモンゴルの三つの城（城郭都市）にも、それぞれ違いがあったことがわかります。チントルゴイ・バルガスは、圧倒的な規模と整った南北二城制をとって中心地機能が卓越していました。いわば首都的な拠点機能をもったといえます。これに対してハルブヒン・バルガスはチントルゴイ・バルガスと比較すると副都的な機能を持ち、ウラン・ヘレム・バルガスは最も小規模でしたが防御機能が卓越した軍事要塞的機能を果たしたといえるでしょう。つまり契丹（遼）は領国の西端に同じような三城を整備したのではなく、機能を補完しあう三つの城を配置したと考えられるのです。

3. ヨーロッパ中世城郭との比較

一一世紀のモンゴルに築かれた城郭は、世界的な視点から見ても、どのように評価できるかを考えたと思います。そこでヨーロッパの中世城郭と、城郭構造を比較します。ヨーロッパでは一一世紀から一三世紀にかけて、ローマ帝国崩壊後の騎士の拠点として現れたモット・アンド・ベリー型城郭から、高い城壁をめぐらし塔がそびえた中世城郭へと発達し、さらに**十字軍**による中東との交流によって、イスラムの城づくりに影響を受けた新形式の城へと、城郭が大きく変化していきました。

一般的にイメージされるヨーロッパの中世城郭は十字軍以前のものです。西ヨーロッパの各国に魅力的な城郭が多く築かれました。世界遺産になっているドイツのライン川沿いにある一二世紀のマルクスブルグ城 (Marksburg) は、その典型例です(図6)。この城は高い天守 (Bergfried・ベルクフリード) を中心にした山城でした。こうした城郭が各国に築かれていったなかで、十字軍から帰国したイギリスのエドワードI世が築いた城を事例に、城郭が具体的にどのようなように変わっ

十字軍

一〇九五年にローマ教皇ウルバヌスII世の呼びかけによる第一回十字軍から、一二七二年の第九回十字軍まで行われた西ヨーロッパのキリスト教国の諸侯による軍事遠征。聖地エルサレムをイスラム教国から回復することを目指した。



図6 ドイツ マルクスブルグ城

たかを検討します。

最後の十字軍遠征であった第九回十字軍に参加したイングランドのエドワードⅠ世は、一二七三年に帰国してイギリス王となり、彼に従わなかったウエールズ公国を征服しました。そしてウエールズを支配するために一三世紀末にウエールズの要所につきつぎと城と城下を建設しました。そのうちのひとつで世界遺産に登録されているポーマリス城 (Beaumaris) は、一二九五年から建設された城でした。

この城には、それまでであれば当たり前だった高くそびえた天守はなく、ほぼ同じ形態の櫓を等間隔に規則正しく配置していました。また本丸の塁線の周囲には帯曲輪を備え、主城壁が直接攻撃にさらされないようにしていました。さらに本丸の出入り口は、大規模な門塔となって大きく帯曲輪へ張り出し、塁線防御の要として機能するよう設計されました(図7)。ポーマリス城の構造は従来のヨーロッパの城郭と、まったく異なっていたのです。そしてエドワードⅠ世がウエールズ北部に相前後して築いた七つの城郭すべてが、同じ考え方で築かれていました。だから、こうした構造は、ヨーロッパの一三世紀第4四半期における城郭プランの到達点を示したと評価できます。

こうしたポーマリス城の構造の特徴は、先に検討したモンゴルのウランヘレム・バルガスと驚くほど高い共通性をもっていました。ポーマリス城の等間隔で規則的な塁線への塔の配置は、ウランヘレム・バルガスの規則的な馬面の配置に相当し、主城壁と堀との間に帯曲輪を配置した点も両城に共通しました。この帯曲輪は、日常的には多目的な空地として使用され、戦時には防御の拠点となり、一旦、敵が

侵入すれば、主城壁直下で敵を撃退する空間として機能しました。

両城とも大きく帯曲輪に張り出して塁線の防御拠点として機能した虎口空間をもったことも注目されます。ポーマリス城では門塔 (Gate-house) として、ウランヘレム・バルガス

では甕城として虎口空間がありました。ポーマリス城の門塔が城主の主要御殿としての機能をも備えた点は、ウランヘレム・バルガスと異なりましたが、軍事的な機能は基本的に同じでした。

モンゴルとヨーロッパの城郭を比較すると、一一〜一二世紀のモンゴル高原における契丹(遼)城郭

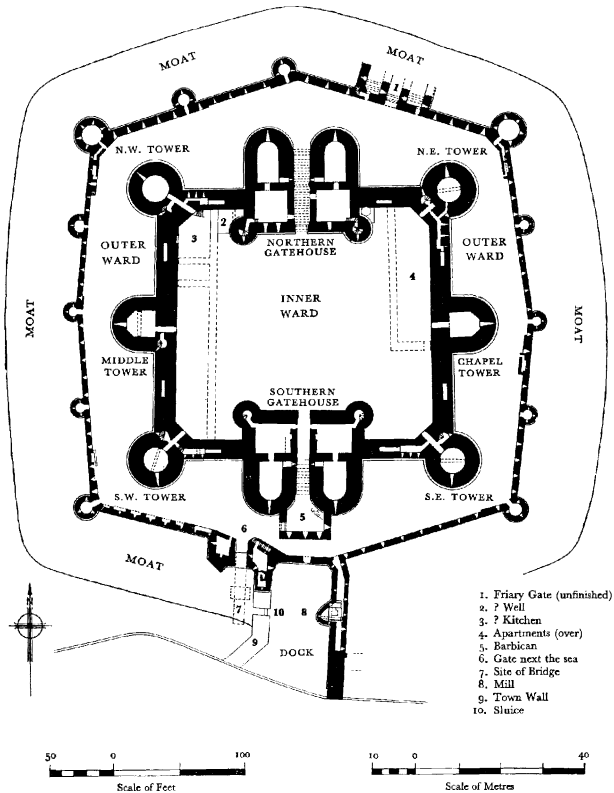


図7 イギリス ポーマリス城 (Arnold Taylor, The Welsh Castles of Edward I, The Hambledon Press, London, 1986) より

は、ヨーロッパの十字軍以降の城郭に匹敵し、城郭プランとしては、より早く進んでいたと評価できるのです。つまり契丹(遼)時代のモンゴル城郭は、世界史的に見ても最先端の城郭であったといえます。これまでアジアとヨーロッパの城郭構造を具体的に比較した研究は少なく、モンゴル城郭の先進性を世界史的視点で提示できたことには大きな意味があると思います。

ヨーロッパの城郭の変化は中東の城郭から大きな影響を受け、モンゴルの城郭は先述のように中国からの影響が濃く見られました。西と東といった対比の視点から分析することができ、そうした切り口で考えても興味深いと思います。しかしモンゴルの契丹(遼)城郭は、中東のイスラム文化圏の城郭とも、塔の規則的配置、シンメトリーな全体構造、甕城の成立など、城郭の基本骨格について、強い近似性をもっていたといえます。中東の城がそうした特徴をもっていたからこそ、十字軍以降の西ヨーロッパの城郭に、ポーマリス城のような影響を与えることができたのです。

つまり東と西のそれぞれの対極的な伝播という単純な理解では、世界史的な中世城郭の構造発達を充分説明しきれない部分が残ってしまうのではないのでしょうか。視点を逆転させて、中東―中央ユーラシア地域の中世城郭こそが、汎ユーラシア大陸の城郭にきわめて大きな位置を占めていたと考えるところから研究を組み立て直す必要があると思います。だからモンゴルの中世城郭を究明することは、ヨーロッパ―中東―中央アジア―極東アジアといったユーラシア大陸における城郭構造の相互関係を読み解く鍵を握っている、と考えています。

4. 日本城郭との比較

日本の城郭でモンゴルの中世城郭あるいはヨーロッパの中世城郭に見られるような、出入り口にL形の張り出し城壁（外柵形）を設けることが一般化したのは、一六世紀第三四半期になってからでした。織田信長が築いた安土城、豊臣秀吉の大坂城などはその典型例であり、それら天下人の居城が諸大名の城の二本となったため、近世初頭には信長・秀吉の城を規範とした城郭―織豊系城郭（しよくほうけいじょうかく）―が日本列島に広く成立しました（図8）。これは古墳時代に前方後円墳が首長層に共有の墳墓形式として取り入れられたことに酷似しており、近世の政治体制は城郭研究の立場からは「織豊系城郭体制」ということができるのです。

モンゴル中世城郭はアジアの中世城郭の主流に属したものであったのに対し、日本の中世城郭は不正形の形態、山城の比率の高さ、くふうした出入り口の出現の遅さと非伝播的成立といった諸点で、アジア世界の中で特異なものであったといわざるをえません。山城が多く分布したことは東アジアでも朝鮮半島やロシアの極東地域、そして日本列島に特徴的なことで、周縁的な特性が表れたと評価できます。ユーラシア大陸の反対側のヨーロッパでも、先に紹介したマルクスブルグ城のように、西ヨーロッパは多くの山城を生み出しました。同じように周縁的な位置づけができると思われず。

もちろん中国やモンゴルに山城がなかったわけではありませんが、モンゴルでは山城を築くのに適した山が周囲にあっても、かたくなに平地城郭を築いていました。城郭の築き方に対する規範意識という

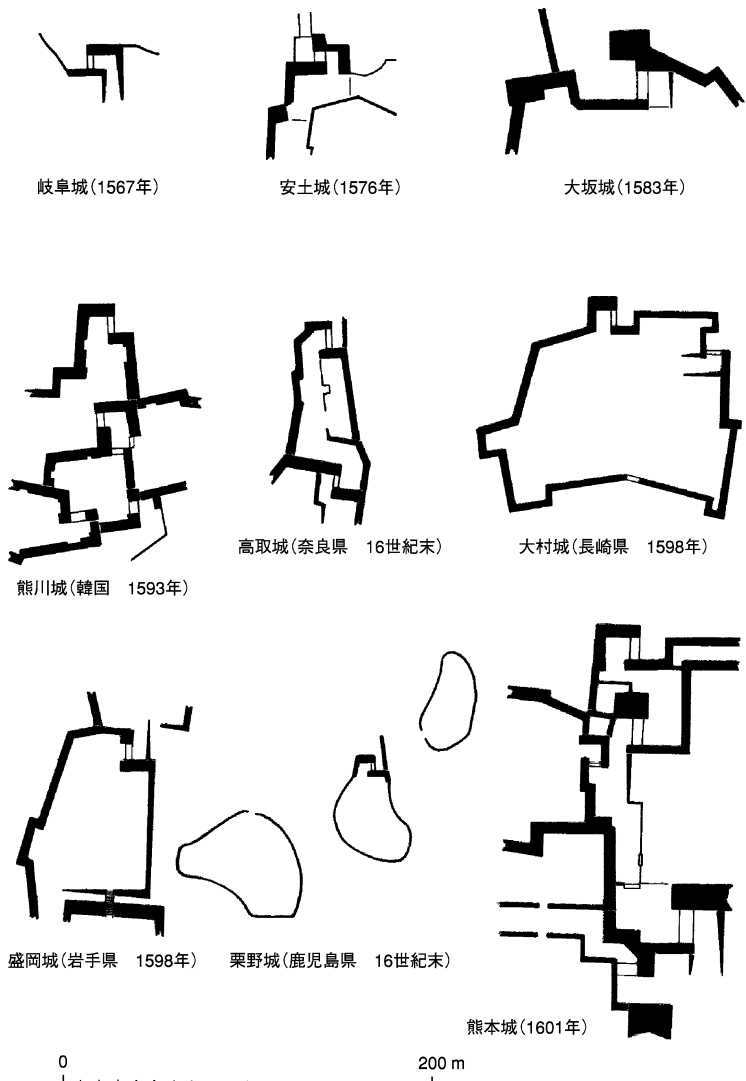


図 8 日本における 16 世紀後半～17 世紀初頭にかけての外柵形の発達

べきか、文化的な型による規制というべきか、日本のように不正形の山城を了とした意識とは、かなり大きな違いがあるように感じられます。そうすると日本列島の中世城郭は、アジアの中での孤立的な構造形態といった特徴をもっただけでなく、アジア的な城郭のなかでの周縁的存在としての特性をもち、それがヨーロッパ的な城郭の周縁的特性をもった西ヨーロッパの城郭と近似性をもった、という複雑な構造特徴をもったと規定できます。こうした視角から日本列島の城郭に迫れるのも、比較研究なればこそ、と思います。

まとめ

外柵形などの柵形を備えた出入り口形式は、防衛と出撃のバランスにもっとも優れた最適解であったと評価できます。だから出入り口の進化において、外柵形は広く世界の城郭―さまざまな時代のもの―に共通したのです。世界の城郭の出入り口の歴史を俯瞰すると、紀元前五〇〇〇年頃に初源的な外柵形がアジアで成立し、紀元前二四〇〇年にはヨーロッパでも最初の外柵形を用いました。日本では外柵形は紀元後二〇〇年頃に一旦、現れたのち、紀元後一五七〇年代以降の戦国時代に本格的に使われた、とまとめられます。そして地球上でもっとも遅く外柵形が出現したのは紀元後一八〇〇年代のニューギニア島のマオリ族の砦でした。

今日の報告で概観してきましたように、モンゴルの中世城郭を理解することは、アジアの城郭だけで

なく、ヨーロッパや中東の城郭をも射程に入れたユーラシア大陸の城郭を考える最も重要な糸口になると思います。現地調査にはさまざまな苦心がありますが、札幌学院大学総合研究所のすぐれた先生方との学術的な連携を深めつつ、一層、魅力的な城郭の謎に挑戦していきたいと考えています。

札幌学院大学総合研究所について

札幌学院大学の前身である札幌文科専門学院の創設は一九四六年、爾来、「学の自由」「独創的研鑽」「個性の尊重」を大学の理念として、研究と教育にあたってきました。本研究所は、これまでの札幌学院大学の研究活動の蓄積を継承し、学内の研究活動のいっそうの活性化、研究成果の積極的な発信と地域社会への貢献を目的に、二〇〇八年四月に設立されました。本学は五学部八学科からなる文系総合大学で、百二十名を超える研究者が所属しています。その専門領域も、経営学、経済学、法学、社会学などの社会科学を中心に、心理学や言語・文化研究など人間の生活に関する多様な領域を網羅しています。本研究所はこうした強みを生かして、学際的な研究活動を展開していきたいと考えています。

札幌学院大学総合研究所長・人文学部教授 松 本 伊智朗

山越康裕

札幌学院大学人文学部准教授。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、札幌学院大学人文学部講師を経て二〇〇九年より現職。「モンゴル語」『事典…世界のことは141』(梶茂樹・中島由美・林徹編)大修館書店
「新天地をめざした白鳥の子孫」『北のことはフィールド・ノート』(津曲敏郎編)北海道大学図書刊行会

白杵勲

札幌学院大学人文学部教授。筑波大学大学院博士課程単位取得退学。博士(歴史学)。奈良国立文化財研究所主任研究官、文化庁文化財調査官を経て二〇〇七年より現職。「鉄器時代の東北アジア」同成社
『北方社会の交流と変容』山川出版社(共編)

鶴丸俊明

札幌学院大学人文学部准教授。筑波大学大学院博士課程満期退学。日本女子大学・明治大学・東海大学・東京学芸大学等の非常勤講師を兼任して、一九八七年より現職。「石器の基礎知識」I・II 柏書房(共著)
『北海道地方の細石刃文化』『駿台史学』47

ダムテインスレン・ツエヴェンドルジ

モンゴル科学アカデミー考古学研究所所長。モスクワ大学歴史学部卒業。歴史学博士。モンゴル科学アカデミー歴史研究所考古学センター長を経て二〇〇二年より現職。「モンゴル考古学研究」1~5等著作多数

董新林

中国社会科学院考古研究所研究員。内蒙古第二工作隊隊長。一九六六年生。吉林大学考古学系卒業。北京大学研究生院修了。中国社会科学院考古研究所副研究員を経て二〇〇九年より現職。
『中国古代陵墓考古研究』福建人民出版社
『遼上京城址の発現と研究述論』『北方文物』二〇〇六一三

千田嘉博

一九六三年愛知県生まれ。奈良大学・文学部・文化財学科卒業。文部省在外研究員としてドイツ考古学研究所へ留学。名古屋市教育委員会・学芸員、国立歴史民俗博物館・考古研究部・助手、助教授を経て、現在、奈良大学・文学部・文化財学科・教授。大阪大学博士(文学)。主な著書に『城館調査ハンドブック』新人物往来社、『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、『戦国の城を歩く』ちくま学芸文庫などがある。

佐川正敏

東北学院大学文学部教授。東北大学大学院博士課程中退。東北大学助手、奈良国立文化財研究所主任研究官を経て二〇〇一年より現職。
『日本の旧石器文化―東・北アジアから考える』『倭国誕生(日本の時代史1)』吉川弘文館
『中国都城の発展史と古代日本への影響』『東アジアと日本の考古学Ⅴ集落と都市』同成社
『中国遼西地区新石器時代中期興隆窪文化段階の文物集成』『アジア文化史研究』4

札幌学院大学総合研究所 BOOKLET No. 2

草原の古代文化—モンゴル高原の考古学—

札幌学院大学総合研究所・モンゴル科学アカデミー考古学研究所
研究協定締結記念国際シンポジウム

白杵 勲 山越康裕 鶴丸俊明

D. ツェヴェンドルジ 董新林 佐川正敏 千田嘉博 著

2010年3月31日 発行

発行 札幌学院大学総合研究所
江別市文京台 11 番地
(011)386-8111

印刷 (株)アイワード

ISBN 978-4-904645-01-7

ISBN978-4-904645-01-7

札幌学院大学総合研究所

BOOKLET No.2